

---

# Training Box

日奈久 夕花子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Training Box

### 【Nコード】

N0356Z

### 【作者名】

日奈久 夕花子

### 【あらすじ】

ファンタジー&恋愛の掌編小説並びに短編小説置き場。ブログにて掲載した作品をこちらに整理しました。お題内は基本同一世界。ただしつながりはある場合とない場合がございます。リハビリとしての習作作品となりますので、ご了承くださいませ。また、5題という章タイトルから想像する中身と異なる場合もございますので、ご注意ください。各話のタイトルには沿うようにしておりますが、努力がからまわることもありますのでご了承ください。12/30まで毎日更新。30日で一旦終了予定です。(サイト名:「確

かに恋だった様 <http://have-a-chew.jp>  
/ よりお題をお借りしております)

## 1・賭博好きのお姫さま

フィンルディアの第二王女は、それはそれは美しい。

いまだ成人前ゆえに、結うことのないその髪は日に透けて輝き、ほつそりとした面にいたずらな目が若草の色に輝いている。

フィンルディアの第二王女は、それはそれは愛されている。

王と王妃はもちろんのこと、側妃たちの評判も悪くなく、兄弟仲も悪くない。

むしろ、両親たる王と王妃と、側妃と子である兄弟たちには溺愛されているといってもいい。

幸せで素晴らしい、フィンルディアの第二王女。

だけど。

だけどひとつだけ。

彼女は秘密を持っている。

この国の、王女の最大の秘密。

「この前の試合の結果は、どうなりました?」

傍らに控える無二の侍女に、王女の柔らかな声がかかる。

「ええ、下馬評通り……と申したいところですが、大番狂わせができましたわ」

「まあ！ では、今度も、わたくしの勝ちね」

手に持った扇で口元を隠しながら、ころころと鈴を転がすような声で笑う王女。

「……さすがですわ。姫様」

うっとり微笑む、侍女の姿。

フィノルディアの第二王女は、とても美しく愛されている。

けれど、両親も皆も、誰も知らない秘密。

彼女の個人資産が、実は途方もないものになっている、ということ。

彼女が、とても賭博好きだ、ということ。

彼女の特技は変装で、時折城下に降りては少々いかがわしい場所で、賭け事を繰り返している、とか。

その付近ではさり気に姉御と呼ばれている、とか。

誰もだあれも、知らない秘密。

「……さあ、この国での最後で最大の賭けが、もうすぐはじまるわ」  
成人の日まであと少し。

間もなく決定する嫁ぎ先を思って、扇の陰でニヤリとどこか妖艶な  
笑みをこぼす姫なのだった。

f i n

## 2・元騎士様、求職中

品行方正にして質実剛健、誠実なるものであれ。

そんなものくそつくらえ、とばかりに投げ出して、自由に生きてやるぜ！ と、騎士をやめたのはもうどのくらい前になることか。

「……若かった、なー」

断られた店先、深くため息を漏らしながら、男は項垂れた。

最初はよかった。それなりに蓄えもあったし、自由になった身が嬉しいばかりで。

飲んで遊んで、その日暮らしの日々。

軽いけがで、まあ、そりゃ、頑張れば前の通りに働けないこともなかっただろうが、これ幸いと騎士をやめて。

心配する両親には、大丈夫です、またやり直します、なんて、いい顔みせて。

しかし、時間がたつにつれて、両親は渋い顔に。

ためた金使い果たしたあたりから、仕事もしないで遊び歩く男に、周囲は厳しくなってきた。

世の中、金、かー？ 権力かー？

貧乏子爵家に、男を遊び惚けさせる余裕はなかったようだ。

「あー……仕事おちてねえかなあ」

いつそ傭兵にでも思ったが、けがのあと真面目に鍛錬しなかったために変な癖がついてしまった。

ならば力仕事か、と、思ったが、怠けた体は重くすぐに息が切れる。

若かったなあ、と、しみじみ空をみあげつつぶやいて。

のそのそと、宿へと戻る。

実家を追い出されて、日雇いの仕事で乗り切って。

……このまま、うらぶれて、俺は昔騎士だったんだぜー、なんて、よっぽらうってつぶやくようになるんだろうか。

それがあまりにありありと想像できて、男はぶるりと身震いをするのだった。

f i n

### 3・王子様はノイローゼ

「……僕はなぜここにいるんだろう」

王城の豪華な執務室で、書類を片手に、一人の少年がぼんやりと窓の外を眺めながら呟いた。

少年は身なりから、身分が高いことが察せられる。それもそのはず、この国の王太子として若干15歳ながらも執務の一部を担っていた。

「ああ、鳥だ……空を飛べたら自由になれるかなあ……あはははは」  
しかし、覇気がない。茫洋と窓の外を眺め、まるで棒読みでつぶやく。

「……執務中ですよ」

傍らに控えていた侍従が、遠慮がちに声をかける。が、聞こえないのか振り向きもしない。

「ああ……遠くにいきたいなあ。海の方この新大陸にでもいきたい。もう、もういいじゃないか、もうさ、やりたいっていうなら、ぜーんぶ、譲るからさ、もう、ほっといってくれよってね」

無表情のまま、窓の外を眺めつつ、つぶやき続ける少年。

と。

がしゃーんと窓が割れて、黒ずくめの装束の男が飛び込んでいた。

「お命頂戴仕る！」

「殿下！」

そのまま襲い掛かる男に、侍従が王子を守るように飛び出し、控えていた騎士たちも臨戦態勢となる。

きん！ と、男の攻撃がはじかれ、緊迫した空気の中、騎士と男が切り結ぶ。

「あ……」

ぼつり、と。そんな中王子が声を漏らす。

「あああああもう！ そんなに俺が王太子やってんのいやなんだつたら、やめてやる！ やめてやるよちきしょー！！」

ばん！！ と、机をひっくり返しそうな勢いで、王子が叫ぶ。

「で、殿下、何を！！」

「だってそうだろうよ！ ロクに仕事を手伝うわけでもないのに王になりたいとかいいながら俺を狙ってくる弟どもも、ロクに政治のあれこれもなんもわからん上に浪費だけは激しい弟どもの母親どもも、もうもう、勝手にしろってんだ！ 好きに勝手にやればいい、俺はもう知らん。もうもう、もう知らん！ 父上が大変だからと手伝ってはいたが、その父上だって馬鹿な子ほどかわいいんだかなんだかしらんが弟どもをかばいやがるし、そのうえその馬鹿な母親た

ちも、惚れてんだかなんだかしらんが放置しやがる。この国、ぎりぎりだぞ？ 経済状態ぎりぎりなんだぞ？ それをおつまえ、仕事もしねーで金ばっか使っておいて、王位継承の儀が近いからってここまでざかざか暗殺者やら毒やら仕込まれたんじゃ、俺やってられねえって！ 国のため、民のためって思ってここまでやってきたけど、もう限界。もう無理。もう勘弁。生まれた時から命狙われてたけど、10超えてからは仕事手伝いながら頑張ってきたけど、もう、限界。俺、出てく。絶対この国でってやる！」

一気にそれだけ告げると、机の上の書類をなぎ倒し、部屋から出ていく。

「っ、で、殿下ああ?!」

足音高くその場を去る王子の姿に、室内は一瞬茫然としたが、あわてて騎士の一部と侍従が後を追う。

残されたのは騎士と相對していた暗殺者のみ。

気まずい沈黙が続く。

そつと視線を逸らした暗殺者は、静かに剣を引くと、頭をかいた。

「まあ、なんだ……うん、なんか悪かったな」

なんとも言い難い暗殺者の男の言葉に、騎士も剣を引きつつ、なんともいえない表情を返す。

「……まあ、まだ殿下も若いからな。しかし、あそこまでとは……」

殿下、ご乱心。

はたしてこの国がこれからどうなっていくのか、不安に襲われる騎士と暗殺者だった。

f i n

#### 4・民間資格の魔法使い

小さいころ、約束したの。

きつと、きつと迎えに来るって。

「リーふぁ、まっててね。きつとつよくなって、むかえにくるから  
遠く離れた処に引っ越していく彼を、見送るしかなかったあの頃。

いつかきつと、また会えるって。むかえに来てくれるって、信じて  
た。

けれど。

「……まってられなかったの、来ちゃいましたっ」

てへ、と笑いながら首をかしげて見せれば、彼は茫然と、ずれたメ  
ガネを元に戻して。

「ど、どちらさまですか？」

どうやら、10年もたったがゆえに、彼は私のことを忘れたみたい  
です。

「ひ、ひどい……っ、約束を忘れるなんてっ。むかえに来てくれる  
っていったのに！ 強い魔法使いになって、そしてむかえにきてく  
れるって！ 王都で頑張って宮廷魔術師してるってきいたから、私  
も魔法勉強しながらまっつたのに！ なかなか来てくれないから、  
ここまでいたのに！ ひどいいいいい」

「え、ええええ？ ええと、ちいさいころ？ え、あ、もしかして、  
リーファですか？ となりに住んでいた、いじめっ子の」

「え？」

「え？」

「い、いじめてないよ？ 酷い！」

「いやだって、ほら、嫌がるのに虫を押し付けたり、嫌いだってい  
ってるのにココルの実を食べさせたりしたじゃないですか」

「え、泣いて喜んでたんじゃ………？」

「そんなわけないでしょう！」

「がーん、シヨック………」

「いや、どうしてそこでシヨック受けられるのかわかりませんが  
……まあ、お久しぶりです。綺麗になりましたねえ」

「う、うわあ、王都にいつてあなたってば、女たらしになったの？  
なったの？」

「ちょ、社交辞令をそついう風にとられても」

「社交辞令って!! 最低っ」

「ああああ、とりあえず、落ち着きましょう。ここまではどうやって? 遠かったでしょうに」

不思議そうな彼に、胸を張って答えますとも。

「魔法の勉強をして、資格をとつたの。で、さつそく王都まで飛んでみました」

きやるん と、首から下げていた資格証を見せれば、驚いたように彼は瞬いて、それから食い入るように資格証を見始めます。いやん、胸元を凝視だわ。

「転移魔法ですか……?! しかもその資格証、国の発行する魔術師資格とは違うようですね。なに、『地方連合協議会認定魔術師』? なんです、これ、地方団体ですか?」

ぷるぷると首を振ります。

「なんか、民間の有志の方々が立ち上げた団体でー、なんと一日5分の練習で魔法が使えるちゃう! っていう、通信教育だよー。遠見の水晶で先生のチェックもばっちり! これで私も魔法使いになれましたー」

「……え。なんですか、それ。人が魔法学園に必死で勉強して合格し、さらに学校で鍛えられ、やっとの思いで宮廷魔術師になって、そこまで来て転移魔法が使えるようになったというのに」

「え。1か月くらいで使えるようになったよ、この講座だと」  
がっくりと項垂れる彼のそばによって、肩をぽんぽん。

「まあまあ。とりあえず、今夜とめてね？」

はっと振り返った彼に、にっこり。

せつかく、資格まで取って会いにきたんだもの。

もう逃がさないんだからっ。

彼の運命を知る者は、誰もいない。

余談。

かの民間資格、実は立ち上げたも現在講師をしているのも、実力はあれども人に仕えるのメンドイとばかりに引きこもったり自由に生きてたりした超優秀な魔術師たちが、遊び半分で立ち上げたものだったとさ。

f i n

## 5・召使いは時給制

「それでは主さま、今日はここで失礼いたします」

就業時間を終えて、ふわりとお仕着せのメイド服のスカートを揺らしながら礼をする。

深く腰を折りながらも、バランスは崩さない。これって匠の技だね。

ゆっくりとそのまま体を元に戻せば、部屋の中、中央に置かれた力ウチにしどけなく腰かけた、風呂上りらしき艶やかな濡れ髪の主様先ほど届けたワインを片手に、じっとこちらをご覧になっておられます。

あらやだ、色気がただもれでしてよ？

「もう帰るのか。どうだ、一杯飲んでいかないか」

まあ素敵なご提案。主様が飲まれるワイン、とてもいいものが多いのですよね。こちらに来てから、私ったらアルコールに強くなったみたいで。おいしいお酒をおいしく飲めるようになったのよね。じゆるり、と内心はよだれぬぐいっつも、必殺メイドの微笑み！

「とんでもないことでございます。一介の侍女風情がそのようなどうかお許しくださいませ」

そそと告げてみたならば、どこかまずいものでも召し上がったようなお顔の主様。まあ、失礼な。

「今更何を言う。ならばなんだ、仕事でなければいいのか？」

「いえ、お断りいたします。仕事としてでしたら、お付き合いさせていただきますけれど」

「……どつちだ。まあいい、座れ」

「失礼いたします」

身のこなしは丁寧。ゆつくりと邪魔にならないように、カウチのそばへ。

ぼんぼん、って、そこお隣ではありませんか？ 座れと？ そこに座れと。

にやにやしないでくださいな、主様。エロおやじくさいです。いいませんけど。

しょうがないので腰をおろし。勧められるままに一杯二杯。あらおいしい。

窓の外は綺麗な月夜。これはいい月見ワイン。なんかゴロが悪いです。

静かにかけられる声に、静かにお応えして。程よく飲み終わったところ、そろそろお開き。

「しかし……かなり飲んだらうに、崩れないな、お前」

どこか悔しそうな主様。そこそこお酒がまわったのか、色づく頬に濡れた唇、あら、目まで潤んで。これはまた、美形だけに目の保養ですね。

「ええ、それが取柄でございます。では、今日はこれにて」  
礼を取って、からのデキャンタとグラスを載せたワゴンと共に、退室します。

あ、そうそう、忘れるところでした。  
出口のところでもぐるり、振り返って。

「主様、本日、6時間の残業となります。夜間でもありますので割増しで、請求させていただきますので、よろしくお願いいたしますね。それでは」

はじけるような笑顔でにっこりと。そう告げると、今度こそ、静かに礼をしながら部屋を後にしたのでした。

ふっふっふ、お給料、時給制にしていたよかった。

f i n

## 1・恋愛じっこなら余所でやりなさい

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

それなのに。

「恋愛じっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、じっとこちらを見つめる目は、呆れたような色で。

仕事の手を止めさせてしまった私を、どこか非難しているようだ。

「……………だって」

「でももだってありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合ってる暇はありません」

さっさと帰りなさい、と、そう短く告げられて。

そのままパソコンへと再び視線を落とす彼。

「あ……………の……………」

恐る恐るかけた声すら、もう届かないほど集中していて。

それ以上声をかけることなんか、できなくて。

しばらく、じっと見つめていたけれど、私のほうを見てくれることなんか、なくて。

悲しくて。痛くて。つらくて。

私は、そっと、部屋を後にした。

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ただ、彼しかいなかった。

幼い恋。小さなころに刷り込まれた、あこがれのお兄ちゃんは、今や作家先生。

隣同士、幼馴染。年の差はいかんともしがたいけれど、隣のおばさんがかわいがつてくれたから、彼の仕事場の家事のお手伝いをする、と、高校に上がってから許可をもらった。

本人が知らなかったなんて。それこそ、私が知らなかった。

そして。

いつものように、甘えた私を。

仕事中の彼は、取り合ってくれなくて。なんだかさみしくて悔しく

て。仕事から自分に視線を向けてほしくて、つい、言葉がこぼれた。  
好きって。

いうつもり、なかったのに。  
言っただって駄目だって、わかってたはずなのに。

返された言葉は、冷たくて。どこまでも、冷たくて。  
気が付けば、ほろほろ、涙がこぼれた。

ずっと懂れていた。  
それが本当の恋かどうかなんて、どうでもよかった。  
恋愛ごっこ、だなんて。

この思いが、錯覚かどうか、なんて。  
彼にだって、断言される筋合い、ないのに。  
遊びだなんて。ごっこだなんて。そこまで言われる筋合いなんて、  
ないのに。

夕暮れの街は、紅に染まる。  
じっと、空を睨み付ける。悔しい。悔しい。悔しい。 悲しい。

長く伸びる影を眺めながら、ひとり、静かに泣いた。

## 2・子どもはもう寝る時間です

帰りたくなかった。

家にまっすぐ、帰りたくなかった。

だって、隣は彼の家。お兄ちゃんの家。

仕事場にこもることの多い彼が、いつもいるわけじゃないけれど。なんだか、家に帰りたくなかった。

放課後。

昨日まではクラスメイトと、あちこちに出かけたり、友達の家にお泊り会したりして。

高校までずっと一緒だった友人たちは、その親とも仲良しだったりするから、結構気軽に家にちゃんと連絡さえすればお泊り可だったり、連絡入れればある程度遅くまでオッケー、だったりして。

夜遊び、ってほどじゃないけれど、いつもより帰りが遅くなった。

お母さんは心配してはいたけれど、お兄ちゃんのところから帰ってから変だ、ってわかってたみたいで、何も聞かないでくれた。お父さんにもなんとかごまかしてくれてるみたいで。正直、知られてるって怖さはあつたけど、でも、ありがたかった。

さすがに今日は、友達たちも用事があるようで、ひとりぼっち。

今までなら、泊まらないまでも、友達とワイワイ過ごすことで気持ち紛れるし、そのまま帰宅すればその気持ちを継続できるし、で、なんとかのりきってきたけど。

ぼつん、と、一人になると、余計なことを考えてしまう。

嫌われた、という気持ちとか。お兄ちゃんがそんなことで嫌うはずない、という願望とか。年が離れた人を、なぜあんなに好きになつたのかな、とか。もう、会えないかな、とか。会えないのか、会いたいのか、会いたくないのか。ぐるぐる回る気持ちは複雑で、なかなかこたえがでてこない。考えすぎて熱が出そう。ため息を漏らしながら、それでもまっすぐ帰る気持ちになれなくて、公園へ足を向けた。

小学生たちがきゃいきゃいと遊ぶ公園。昔、私もお兄ちゃんに遊んでもらったなあ、なんて、思い出す。

よほど小さい時から、私はお兄ちゃんが、彼が好きだったみたいで、足元がおぼつかない時から見つけると駆け寄るような子供だったらしい。おぼろげな記憶の中でも、まだ幼児の私が小学校高学年だから中学生だかのお兄ちゃんに駆け寄っては、遊んでもらおうとしている場面が浮かぶ。

……考えたら、すごい迷惑な子だったんだね、と。

今更ながらに気が付いて、恥ずかしくて身悶えしてしまう。

でも。 それでも、好きなんだよなあ。

なんで、と言われても困るけれど。

そんな風に迷惑な子供だったし、時々、めんどくさそうに困ったように、したけれど。

……遊んでくれたんだよな、子供と。ほっとけよー、なんていう同級生の言葉に、ごめんな、なんてこたえて。つまらなかつたらうに幼児である私の相手を、しょうがないなあなんて顔で笑いながらしてくれて。

甘やかされてた。構ってもらってた。

それが当然、と、思ってしまうようになるくらいに。

ため息が漏れる。あーあ。自業自得とはいえ、つらいなあ。もう少し、もう少し、大人になつてから、いうつもりだったのに。好きです、って。だから頑張つてここまで立派になりました、って。あーあ。

夕暮れの公園は、日が落ちて、子供の数も減っていく。少し肌寒い気がしてふるり、と、体を震わせたら。

近くで、呆れたようなため息が聞こえた。

ばっ、とそちらを見れば、彼の姿。え。なんで？ どうして？ と軽くベンチでプチパニックを起こしていると、少しばかり呆れたような声で、彼が言う。

「何をしてるんですか。バカ娘。遅くまでこんなところで。夜遊びのつもりですか」

「え………なんで？」

「なんで、も、ないでしょう。連絡してないんじゃないですか？いつもの時間に連絡がないのに帰ってこない、と、おばさん心配してましたよ。まったく………どこにいるのかとおもったら」

言われてみれば、今日はそこまで遅くなるつもりはなかったの、連絡はしてなかった。あわてて携帯を取り出して時間を確認。うわ、19時過ぎてる。まだ19時、ともいえるけど、私にしてみれば連

絡なしで帰らない時間ではない。

さらに、着信が複数。確認すれば母と……そして、彼からの、着信。視線を挙げれば、ふう、と、深くため息をついた彼。よく見れば少し汗ばんでるような気がする。探してくれたの？ 私のこと、うっとおしかったんじゃないの？ それでも、探してくれたんだ。

「う、めんなさ……」

「全くです。この公園、遅くなると変質者出るって知ってるでしょう。さあ、帰りますよ」

ぐい、と腕をつかまれて、立ち上がられる。ぐいぐい。引っ張られるように公園を出る。強い力。でも、転ばないように気を付けてくれる。昔からこうだった。強くて強引なようで、優しい。

優しくされたら、諦めきれないよ。

目に涙がたまっていく。何かの拍子にこぼれそうになりながら、家の前について。

「まったく。文筆家なんですからね、運動なんてできないもやしなんでしょうか……ら……」

ぼやきながら振り返った彼が、言葉に詰まる。

ああ、涙。隠せなかった。

ぽろり、と、一滴。ほほを伝ってこぼれていって。

沈黙。何も言えなくて。ただ二人で立ち尽くして。

どうしよう、と、思っていたら、視界に指が見えた。彼の手。少しごつごつして、ペンだこのある手。それが、すっと私のほうに伸びてきて。こぼれた涙を救うように、そっとほほと目じりをなぞるように。

触れる、熱。

驚いて目を見張れば、はっ、と我に返ったように彼の手が戻される。

なに。いったいなに？

「っ。子どもはもう寝る時間です。さっさと帰りなさい」

そういうと、軽く私の背を押して、家のほうに進ませる。

え、どういうこと？ そのままふらふらと玄関の前まで進んで。扉に手をかけたところで、振り返ったら。

もう、彼はいなくて。

混乱。困惑。パニック。

20時じゃ、さすがに、寝るにも早い気がするよ、お兄ちゃん。

私は、ちょうど玄関の物音にきづいて出てきた母に声をかけられるまで、そこに立ち尽くしていた。

### 3・あなたの気持ちはよくわかりました

それから。

不思議なもので、会おうとしなければ、私と彼はこれっぽっちも接点がなかった。

ちよつど仕事が詰まっていたのか、実家へ戻ってくるのが少ない彼と、日中は学校の私。

今までなら、会いたくて会いたくて、できるだけ口実を設けて隣に行ったり届け物をしたりと、していたけれど。

それをしなくなった途端、彼と会うことはほとんど、全くと言っていいほど、なくなった。

ちらり、と見かけることがないわけじゃなかったけれど、忙しそうな彼に私から声をかけるなんて、できるわけがなかった。

1週間、2週間。時間が過ぎていく。

会いたいな、という気持ちが湧き上がる反面、彼の冷たい言葉や迷惑かもしれないという思いがストップをかける。

不自然に遅く帰るのをやめたにもかかわらず、これほどまでに彼に会わないということは、彼が会いたくないと思ってる証拠のようにすら思えて。そうしたら、余計身動きできなくなった。

「馬鹿だねえ」

公園で、友達と二人。目の前でカフェオレを音を立てて飲んだ彼女は、ちらりとこちらをみる。

「馬鹿だつてわかつてるよ」

「いいやわかつてないね」

手の中のパックをのむ気に慣れずに、右に左にと手遊びしつづつむけば、彼女のため息。

「ってかき、いい加減ほかの男にも目を向けなつて」

「……そうはいつても、ねえ」

「あんた、ガード固いんだよ。気になつてるやつ、いないわけじゃないんだ。もっと気楽にいきなよ」

ぶらぶらとベンチから降ろした足を揺らす彼女の、短いスカートが翻る。

少しだけ奔放な彼女。だけど、その言動や外見に比べて、彼女こそガードが堅いのを私は知つてる。

その彼女に、こうもいわれるとは。……少し考えたほうがいいんだろうか。

「んー……考えてみるよ。なんか、うん」

「そうしな」

軽く返して、彼女が笑う。美人だと思う。派手目の美人。だけど、笑うとかわいらしい。

……彼女みたいに大人っぽい外見だったら、もう少し彼は、私を見てくれたらどうか。

そんな埒もないことを考えて、また、ため息を漏らした。

「ただいまー……」

扉を開ければ、ふわりといいにおいが漂っていた。

ぐう、と、現金なおながなる。思わずぺちりと一度おなかをたたいてから、ダイニングへと向かう。

「あら、お帰りなさい」

ばたばたと台所で料理をしていたらしき母が、振り返って笑う。

「ただいまー。あー、おなかすいた。ねえ、ごはんすぐ？」

鍋を覗き込みながら言えば、呆れたようにぺちりと頭をたたかれて。

「ええ、すぐできるから着替えてらっしゃい。ちゃんと手も洗うのよ」

まるで小さな子供に言うように、くすくすと笑いを含めていう母にはーい、と、わざと幼い返事を返して。

ダイニングを出ると、二階の部屋へ。制服を脱ぎながら、ふと窓の外をみれば、隣の家がみえる。庭と、家。そして、あの、見えそうで見えないぎりぎりの場所にある窓が、彼の、お兄ちゃんの部屋。カーテンが閉まったままの様子に、相変わらず忙しいんだろつな、と、思っ苦笑する。

結局、彼のことを考えてしまつらしい。

本気で、新しい恋を探したほうがいいのか、なんて。そんな風に思った。

「あ、いいところに。これ、お隣にもって行って」

着替え終えて下に行けば、鍋と回覧板を用意した母がにっこり笑う。

「えー……おなかすいたのに」

「さっさと行く。早く戻ってらっしゃいよ」

「はい」

しゅしゅと、それらを持って家を出る。

窓もしまつてたし、カーテンもしまつてたから不在のはず。おばさんに渡してさっさと帰ろう、と、隣の家チャイムを押せば。

「はい」

「おばさん、回覧板とおすそ分け持って来たー」

「はいはい、ちょっとまつてねー」

インターホンから明るい声。つられるように笑顔になる。

しばし待てば、足音。……おばさんにしては焦つたような？ 少し首をかしげていれば、ばたん！ と大きな音がして、玄関があいた。

「あ……」

「……久しぶりですね」

彼、だった。どこか焦ったような様子で、扉を開けた彼。まさかいるとは思あなかつたので少し焦る。

「あ、あの、これ。かーさんから。おすそ分けとあと、回覧板！」

ぐい、と、勢いそのままに渡して。

「じ、じゃあ。おじゃましました！」

「あ、待ってください」

くるり、と踵を返そうとしたら、引き止められて。

余計にあせる。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ちゃん忙しいのに、なんか邪魔ばっかで。うん、だいじょうぶ、私は平気だし、うん。あ、友達にいわれたんだ、新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもうんだ！ だから、うん。いままでありがとうね、お兄ちゃん！」

焦って。言わなくていいことまで、言ったかも、って。気づいたけど。出てしまった言葉は、戻せなくて。

振り返ることもできないまま、立ち尽くしていれば。それまでずっと沈黙していた彼が、深く長い、重たいため息をひとつ、漏らして。

「あなたの気持ちは、よくわかりました。引き止めて済みませ  
ん。おばさんにお礼いっておいってくださいね」

そういうと、しばらくして、ぱたんと玄関の閉じる音。

……ああ。

そのまま、どこか茫然とした足取りで、家まで帰る。

「ただいまー……」

「おかえりな……っ、ちょっと、どうしたの!??」

リビングに入れば、母が焦ったように駆け寄ってきて。

「え、なに?」

「なに、って。……あなた、気づいてないの?」

どこか痛そうな表情で、そっとほほに触れる母の手。

あ。私、泣いてたんだ。

「……っー」

ごじごじと、目元をぬぐえば。それ以上何も聞かずに。

「さ。ご飯にしましょ。今日はパパも遅いし、二人で食べるわよ。  
あったかいのおなか一杯、食べなさい」

そう、そっと肩を押して、テーブルに促してくれた。

晩御飯は、ちょっとだけ、塩味が効きすぎてる気が、した。

#### 4・背伸びをするのはやめなさい

「じ、じゃあ、お試しってことで」

目の前で照れたように笑う人に、頷いた。

どこかぎこちない私の笑顔に、隣に付き添っていた親友が、ばん！と背中をたたく。

「いったあ……」

涙目になりながら背中を抑えれば、にやにや笑う親友。

「ま、気楽にいきなよ。な、彼氏候補君も、そうおもつたる」

「あ、ええ。僕としては、お試しでも付き合ってもらえるだけラッキーっていうか！」

真っ赤な顔で、綿綿と言い募る少年に、思わず顔がほころぶ。

うん、大丈夫な気がする。お試しだけど。この子となら、やっていけそう。

ちらりと浮かんだ面影は、見ないふりしてぎゅっと胸の奥で握りつぶした。

つまり、何がどうなったかというと。

あまりにどんよりしていた私の様子に、クールなようで人情家な親

友は、さあはけ、とばかりに問い詰めてきて。答えないわけにもいかないというか……たぶん、私自身が話たかつたんだと思う。お兄ちゃんとの会話を、話して。呆れたようにため息をつく親友が、ならば、と、提案したのが。

実際に、お試しおつきあいを試してみましよう大作戦。

長いよ、と突っ込んだら、でこピンされた。ひどい。

まあ、実際お試したいといっても、相手がいなきゃどうしようもないよという私に、親友はにやりと笑って。実は紹介してくれっというの、数件あったんだよねー、と、語尾をハートにはねさせながら、告げてくれた。

驚く私の状態もなんのその、その数名の名前を挙げ、そのうえでお勧め、という少年にその場で電話。お試しおつきあい、という条件に了承を得て。

そしてその日の放課後にご対面。冒頭に戻るわけで。

そんなわけで、生まれて16年。初めて彼氏ができました。仮だけどね。

で、どうしたらいいのかわからない私は、とりあえず、少年と一緒に帰宅することになって。朝も、路線は違うけれど駅で合流できそうだと少年がいうので、そうすることになって。ただ、慣れないからどうしていいかわからなくて、無言のままもくもくと二人で歩いて。いや、少年は最初一生懸命話しかけようとしてくれたんだけど、私も、私がつまり返せなかったっていうか。しょうがないけれど、そんな風な状態で。あれー、私ってこんなに人見知りだったかなあ、

なんて、疑問に思いながらも、一応こう、たまには一緒にお昼を食べたりとか、放課後ちよつとだけ寄り道したりとか。そんな風に彼氏彼女つぼく、それつぼく、過ごしてはいたのだけれど。

……違和感、というか。隣を見て、たまに話が弾んで、顔を見たら、少年で。その瞬間に違う、なんて思ってしまう自分がいて。そのまま黙ってしまう私に、少年は心配してくれるけれど、ごまかすしかできなくて。

少年は、たぶん、本当に私のことを好きでいてくれるんだなって。会話の合間の照れたような仕草やら、声やら、時々たぶん手をつなぎたいのかなって感じで動く手から、感じられて。

少年のことを好きになれたら、最高に幸せになれるんだろうな、なんて。思うのに。

手をつなぐととされたのを、思わず、静かに避けてしまったり。触れようとする手の温もりが怖くて、体を引いてしまったり。

……そんなことを繰り返して、次第に気まづくなり始めた、頃。

「デートしましょう」

そう少年がいうから。思いつめた表情で、まっすぐにいうから。潮時なのかな、と、頷いた。

日曜日。

近くの繁華街で待ち合わせて。二人で、映画を見て。食事でもしようか、と、街を歩いて。

「……おや」

よく知った声が聞こえて、びっくり、と、体が震えた。彼だ。間違っ  
はずがない。こわばった私に、不思議そうに彼は近づいてきて  
隣の少年に気づいて。

ぺこり、と会釈する彼に、少年も、訝しそうに会釈を返して。

沈黙。そして。

「…………デート、ですか」

ぽつん、と、聞こえた声に、はっと顔を上げると、じつとこちらを  
見つめる彼の眼があつて。

答えられなくて、どうしよう、って思ってた。ぐ、っと、腕を  
引かれて。少年がいたんだ、って、振り返ると、どこか真っ直ぐな  
強い目で、彼を睨むようにみる、少年の姿。

「デートです。失礼します」

ぺこり、と、再び少年は頭を下げると、私を引っ張るように歩き始  
めて。

「あ、え、ちよ。う、おにいちゃ、またね」

それだけを彼に告げて、引かれるままに少年と共にその場を後にし  
た。

ずんずん、ずんずん。少年は足を止めることなく進む。ついて行く  
のに必死で息が上がる。やがて少年は、小さな公園へ着くと、やっ  
と私を振り返って。はっ、と我に返ったように手を放すと、申し訳  
なさそうに眉を下げた。

「ごめん。……勝手なことして」

何も言えずに、首を振る。息が苦しい。

「あの人が、好きなんだね」

はじかれるように顔を上げれば、切なそうな痛そうな表情の少年。

「う、ごめんなさい。ごめんなさい……っ」

「謝るな！」

大きな声にびくり、と、震える。おびえに気づいて少年は、昂ぶりを抑えるように息をついて。

「……忘れるため、だったんだね。ねえ、僕じゃ、だめ？」

じっと見つめながら。切ない、痛むような目を、向けながら、彼は静かに、静かに言葉を紡いだ。

こたえなんて、ひとつしか、持ってなかった。

とぼとぼと、家路をたどる。

夕暮れの街は、朱色に染まって。周りの人は忙しそうに歩いている。とぼとぼ、とぼとぼ、と、うつむいて歩いていると、ふと、足元に影が見えた。

視線をす、つとあげれば、目の前に彼。無言で、じっとこちらをみ

ている。

「おにい、ちゃ」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないんですか？                    そんな、今にも泣きそうな顔して」

すっと伸ばされた手。近づく手。そのままゆっくりと目じりに触れる指。一度目を閉ざして。開けば。

彼が、かなり近くにいて。どきんと、心臓が高鳴った。いけない。いけない。期待させないで。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何も無いもの」

す、っと、一步下がる。これが私とお兄ちゃんの距離。近すぎちゃいけない。近づけない年齢の距離。

笑え。笑うんだ。

「ちょっと、喧嘩しただけだよ。付き合ってるんだから、そんなこともあるよね」

ごめんね、って。謝ったんだ。また。

もう無理だ、って。ごめんね、って。

しょうがない、って、笑ってくれたんだ。

でもあきらめないよって。

「だ、だから、大丈夫よ。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。私ももう高校生だよー」

くすくす、笑って。そう告げたら。

気が付けば、抱きすくめられていた。暖かい腕の中に、包まれていた。

お兄ちゃんのおい。彼の、温もり。ぐらり、と揺らぐ心に、一瞬茫然と仕掛けて、あわててそこから抜け出そうとして。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。ごまかせると思っんじゃないありませんよ」

柔らかな、声が、耳元で聞こえて。

私は、身動きすら、できなくなった。

## 5 ・ 今後に期待、しています

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ずっと、ずっと。

ただ彼だけを、見つめ続けてきた。

ただ、それだけだった。

心臓が、破裂しそうだ。

回された腕から伝わってくる温もり、とか。  
頬に触れる胸元の堅さ、だとか。

ふわりとかおる、彼の香り、だとか。

くらくらとめまいがする。呼吸がおぼつかない。幸せで、嬉しくて  
うれしくて 悲しくて。

このままじゃいけない、と、ぐっと体を離そうとした。  
けれど。

逆に強く抱きしめられて、私はただ混乱する。どうして？ どうして？  
なんで？

ゆらゆら、ぐらぐら、心が期待する。ダメだってわかってても、でも、期待してしまっ。

酷い。ひどいよ、お兄ちゃん。

あまりに苦しくて、ぼろり、と、涙が零れ落ちた。

「……っ、ないて、るんですか」

鼻を小さくすすった音に気付いたのが、戸惑うように声が聞こえて、少し腕が緩む。

その隙に少しだけ離れて、覗き込んで来ようとする彼の顔を避けるように、顔をうつむける。

「なかないで、ください」

再び伸ばされる手。思わず後ずされば、息をのむ音がして。

ひっく、と、一つ、呼吸代わりに泣いてから。

「ひどいよ、おにいちゃん……」

声は、酷くかすれていた。湧き上がる想いと悲しさと、ずきずきする胸が、つらくて哀しくて。我慢できなくて。私は叫んでいた。

「ひどいよ、どうして、どうして、優しくするのよ。恋愛じつじつて、子供って……いったじゃない！ 私なんか、邪魔なんでしょう？！ だったら、優しくしないでよ！ 構わないでよ、お兄ちゃん、お兄ちゃんの……っ、ばかぁ！ お兄ちゃんなんて、だいき…

…っ  
「っ」

最後まで言えなかった。再び、私は暖かな腕の中にさらわれていて、強く強く、抱きしめられて、息が詰まる。

どうして、どうして。それしか言葉が浮かばない。ぐるぐるぐるぐる、嬉しい幸せと悲しいと、もう、感情がごちゃまぜで、どうしていいかわからなくて。ぎゅ、と、お兄ちゃんのシャツの胸元をつかむ。

「……すみません」

抱きしめる手は緩まないまま、耳元で声が聞こえる。吐息。震える声。くすぐったくて身をよじれば、しつかりとホールドしたまま、しかし顔を見られるくらいに余裕が生まれる。深呼吸。苦しかった。ふわり、とお兄ちゃんの香り。ずきんと胸が痛む。苦しくて、顔があげられない。

「なにを、あやまつてるの。離して、もう、迷惑かけない、から」

震える唇を叱咤して、必死で言葉を紡ぐ。

「違うんです。あんない方して……すみません」

声には、苦渋があふれていて。苦しそうで。はじかれるように顔を上げれば、悲壮な表情をした、彼の顔がそこにあって。

「ちがう、って……」

茫然と見上げれば、深くため息をつく彼。そして、彼はギュッと強

く目を閉ざす。

「……今、何歳ですか」

「え……と、16、だけど」

今更なにを、と、首をかしげる。とたん、瞼を開いた彼は、強く眉を寄せて。

「そう、あなたはまだ16なんですよ。　まだ、いろいろと、大人としては、対応に困る年齢なのです」

ぼかん、と、してしまう。

「え、でも、結婚できる年だよ」

「確かに、法律上はそうですね。しかし、条例上だと……その視線がすい、と、そらされる。

青少年保護条例、だったっけ？　うる覚えのその文字がぼん、と、浮かぶ。

何がいたいんだろう、わからなくて、じっと見つめれば。

うるうるやさまよわせていた視線が、やがて諦めたようにこちらに定められて。

「つまり、あと2年。せめて高校卒業するまで、と、思っていたのですよ」

「…………え？」

「小さいころから、まっすぐ自分に向かってきてくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。それに魅了されない男がいると思えますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐったくて心地よくて、愛しくて　だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

なに。何をいつてるの？　彼が言ってる言葉は、わかるのに、理解できない。

頭が真っ白で、茫然と見返してしまふ。

「せめて、高校を卒業してから。それから、一緒に、はぐくんδειければ、と、思っていたんですよ。ゆっくりと、大切に、心と、思いを。大切だから、愛しいから、ずっと、ずっと、そう、思っていたっていうのに」

「…………お、にいちゃ、ん」

ふう、と、彼はため息をついて。それから、私の大好きな笑顔を浮かべて。

「好きですよ。大好きです。　だから、誰にも触れさせないで。僕のものでいてください」

ゆっくりと、大好きなお兄ちゃんの大きな手が、髪を撫でる。茫然とした私の頭に、言葉がじわ、じわとしみこんでくる。ゆっくりと、顔が熱くなってくる。うそ、うそだ。でも、目の前で彼が優しく微笑んでいて。その目が、とろりと甘い熱をはらんで、いて。

「……すき」

零れ落ちた言葉に、彼の顔がさらに笑顔になって。

嬉しくて、嬉しくて。

気が付けば、私は、大きな声でなっていた。

小さな小さな子供のよう。彼に遊んでもらっていた、小さなころのよう。

彼は、ただ、静かに、静かに、抱きしめて撫でてくれていた。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

落ち着いた私に、彼がいう。

「そ、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに普段めつたに泣かないし！」

「そうなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるところを見る気がしますよ」

「き、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なしにしませんか？」

「っ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……鋭意努力します！」

くすくすと、笑って。彼は。

「今後に期待、しています」

そっと、耳元に囁いた。

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

だから。

恋かどうかなんて、関係ない。

そこにあるのは、きっと、愛なのだから。

F・i・n

## 1・誰にでもスキだらけ

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

「おにいちゃん、だいすき！」

はじけるような笑顔で、告げられるたび、誇らしくてうれしくて照れくさくて。

ただただ無邪気でいられたのは、幼いころだけ。思春期になれば、感情は複雑に揺らいで。愛しいけれど、大切だけれど 真っ直ぐな感情が、どこか煩わしくて。

どこかつっけんどんな対応になっていたその時代ですら、彼女はまっすぐに、ただひたすらに、こちらを見ていてくれた。

それが恋なのか、ただの家族愛なのか、なんて。きつと答えは、まだわからない。

中学、高校、大学、と。

別に彼女がいなかったわけではなかった。それなりの付き合いもしたし、それなりの相手もいた。

ずっと、彼女を見ていたわけじゃない。ずっと、彼女を思っていたわけじゃない。

けれど。

気がつけば、まっすぐに向けられるその視線を、探していた。

腹をくくるまでに、時間がかかったのは、自分だけの秘密。

大学時代に、運よく賞を受賞できて、卒業するころにはありがたいことに作家一本で食べていけるようになっていて。実家とは別に部屋を借り、そこで作業することが増えて。

時折帰宅した実家以外で、彼女に会うことが少なくなったとき、ちよつど彼女が受験だと知った。

高校受験。年の差を如実に実感して、苦く笑ったそんな思い出。

そして。

「おばさんに、許可貰ったんだ！」

幼いころと変わらない、まっすぐな思慕を浮かべ、はじける笑顔の少女が、目の前に、いる。

仕事場のマンション。ある意味一人暮らしの男の部屋へ。

幼いころと変わらぬ笑顔でありながら、その姿はすでに羽化を遂げたかのようで。そう。たとえるならば、花開く寸前のつぼみ。みずみずしさと若々しさをたたえながらも、どこかしつとりと艶を帯びる。

いつのまにか、成長していた彼女の姿に、戸惑う。

仕事に集中しなければ、と、画面には向かうものの、わかっているのか甘えてくる彼女に、心が、体が揺らぐ。

学校帰りなのか、ブレザーの制服姿のまま、短いスカートを揺らし、無邪気に構ってくれと甘える彼女。

それに不埒な思いを抱かない男がいることに、気づかない、なんて。

苛立ちが、起こる。

そんな風に、他の男にも甘えるのだろうか。そんな短いスカートで、学校へ通っているというのか。

その笑顔を、周りの誰にでも見せているのだろうか。 そんなにすきだらけ、なのだろうか。

このまま、押し倒すことだって、できるといつのに。

浮かぶのは不埒な思いばかり。軽く頭を振っていれば、彼女が、その言葉を口にした。

「……好き」

まっすぐに彼女を見つめる。

これ以上は、耐えられない。これ以上は、無理に決まっている。

「恋愛ごっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、そう告げれば、凍りついたように顔をこわばらせる彼女。

ああ。そんな顔をさせたいわけじゃないのに。

けれど、このままだと、彼女を傷つけてしまいかねない。

「……だって」

「でももだつてもありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合つてる暇はありません」

さっさと帰りなさい、と、そう短く告げて。意識を彼女から引きはがす様に画面に向かう。

「あ……の……」

かけられる声にこたえなくなるけれど、答えられない。ぎりぎり引き絞つた理性の糸は、はじけ飛ばんばかりに張りつめているのだから。

しばらく、じつと見つめる視線を感じていたけれど、やがて諦めたように部屋を出ていく彼女。

ぱたん、と、玄関のしまる音が聞こえて、体からやっと力が抜ける。

あんなこと、言いたくはなかった。

抱きしめて、囁いて、口づけて。とろけるほどに、愛したかった。

けれど、彼女は、まだ幼いのだ。

15歳。もうすぐ16だろうか。

歳の差はいくつになるだろう。      ロリコン、と、呼ばれないぎりぎりラインだろうか。

花開く寸前の彼女の色香に、惑わされている自分に、呆れてしまう。

もし、その思いのままにぶつかれば、彼女はきっと今以上に傷つく

に違いない。

ならば。

待つしか、ないのだ。

あと、少し。せめて高校を卒業するまで。

彼女が、本当の意味で花開く日まで。

「これは、かなりきついですね……」

漏れるのは、ただ深いため息ばかりだった。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかつたわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

身動き取れない、時もあるのだ。

## 2・眠るきみに秘密の愛を

いつからだろう。

いつから、変わったのだろうか。

ただ愛しい、かわいい、それだけで済まなくなったことに気づいたとき。

静かに、その思いを、胸の奥底に沈めた。

そう古くない、数年前の記憶。

幼いころは、よかった。何も考えずにすんだ。かわいい妹、そう、いうなればそんな存在。

真っ直ぐに向けられる感情もくすぐったくて、どうせ勘違いのいつかは消える思いだろうと思っていながらも、悪い気なんかするわけがなくて。ただ少しばかりうっとおしいな、と、思わなかったわけではないけれど、それでも、かわいい妹分、だった。

それが変わったのは。

いつだったか。

共にお風呂に入ることもなく、目の前で着替えることがなくなっていた、彼女の小学校高学年時代。

それでもまだまだ、ランドセルを背負った姿は、幼い子供でしかなくて。まっすぐに甘えるのを、いなしながらあやしていた、そんな記憶。

もちろん、そのころから彼女の体は間違いなく女性として成長を始めていて。

……いろいろと変化があったことは、母経由で漏れ聞いては、いた。

けれど。

はつきりとその変化を思い知らされたのは、間違いなく、あの時。

彼女が中学に入学したとき、ではないだろうか。

はじけるような笑顔で、届いたばかりの制服を試着した彼女が、転がるように跳ねるように隣の我が家まで来て。とてもうれしそうにその姿を見せた時 たしかに、驚かされた。

間違いなく、彼女は成長していて。

女の子から少しずつ、女性へと変化をしていて。

その事実には、ショックを受けたのと同時に、そのショックを受けた自分にすら、衝撃を覚えたのは間違いがない。

歳の差や、もろもろ。

もしかして自分にはそういう性癖があったのか、と、それらしき資料を探したり映像をみたりもしたが、ほかの少女らの姿を見ても、どうということはない。

なのに、なぜ、彼女の変化に戸惑い、そして心をゆすられたのか。

……少し考えれば、簡単に答えがでるにも関わらず、その答えを出すまでに、そしてその答えを受け入れるまでに、3年ほどかかってしまった。

理由は簡単。

往生際が悪かった、ただそれだけのこと。

理解してしまえば、今度は別の壁が立ちはだかる。いくら彼女が成

長したといつても、まだ未成年。否、せめて18歳までは、と、思つてしまうのは、古臭い考えなのだろうか。それでも、愛しいと、大切にしたいと、そう思う相手であればこそ、それまでは我慢の時間のだと、強く言い聞かせつつ、今までと変わらず甘える彼女に理性を試されることも多数。自分の自制心に、これほど感謝した時期は、ないだろう。

無邪気に抱きついたかと思えば、そのまま隣で寝ついてしまう彼女の、その無防備さ。その穏やかで幸せそうな寝顔に、伝えられない想いを、静かに囁いた。　　まだ、それで十分だったから。

けれど。

年を取るうが、年上だろうが、いつも穏やかに心広くいられるわけではない。

無防備な彼女に、まっすぐな彼女に、獣性が目を覚ましかけることも多々あつて。それを抑え込んでいるうちに、少しばかりその無防備さに、隙の多さに、無意味で勝手だとわかっていながらも、妬心を抱いてしまうこともあるわけで。

それでも。

あんな顔をさせたかつたわけでは、ないから。

会つてフォローしなければ、と、ちょうど締切が重なつてはいたけれど合間にこまめに実家に戻つていったのだけれど、なぜか、彼女には会えなかつた。

いや、なぜか、なんて、理由なんかわかりきっている。

彼女が会おうと思わないから、これまでのように会うための行動をとっていないから。

会えないのだ、という、事実。

少し時間ができて実家に戻り、リビングでくつろぎながらも、ため息が漏れる。隣家に行くべきか。いや、それで逃げられたらなんて説明をする？ ぐるぐる回る思考の中、ふとみれば、母が電話をしていて。

……帰っていない、と。  
連絡もない、と。

すぐに電話を替わり、探しに行くことを伝えて。  
家を飛び出したはいいけれど、どこを探せばいいのか、わからなくて。  
焦る気持ちに押されるように、あちこちと視線を走らせながら町を走り抜けて。

公園に、たどり着いたとき。

ぼつん、と、ベンチに座る、彼女がいて。

歩み寄れば、寒いのか身震いをする姿。安堵からため息が漏れる。  
と、それに気づいた彼女が焦ったように顔をあげて。

……心配しすぎて、つい、憎まれ口がこぼれて。

とにかく、このままでは、風邪をひかせてしまう、と、手を引いて  
家に戻る帰り道。

そう。  
時は逢魔が時。などと言いつつもい訳するつもりはないけれど。  
魔が差した、と、いうしか、いいようがない。

振り返れば、ほろり、と、涙が彼女のつるりとまろい頬を滑り落ちていつて。

それが、とてもきれいだ、と。どこかぼんやりと、思考の奥で、そう、考えて。

気が付けば、触れていた。

その、すべらかな頬に。濡れた後をなぞるように、ゆっくりと、目をじりをたどる。

濡れたその目が、自分を見つめ返して、ぞくりと背筋が泡立つ。大きく見開かれて、はっ、と我に返る。

いったい、何をしていた！

あわてて手を引いて、握りしめる。

茫然と彼女が見つめるのが、どこか後ろめたくて見透かされているようで。

このまま見つめられていたら、どこかが壊れてしまいそうです。

「っ。子どもはもう寝る時間です。さっさと帰りなさい」

家の前まで来ていたから、背中を押しながら家のほうへと向かわせて。

扉の前まで、どこかふらふらとたどり着くのを確認し終えた瞬間、駆け出していた。

自分の家へ。自分の部屋へ。

どうしたの？ と、のんきに問いかける母に、彼女は帰ったことだけを伝えて、階段を駆け上がり。

部屋について扉を後ろ手に占めた瞬間、そのままずると座り込んだ。

……馬鹿、か、と。

自分の、行動と、言動と。

省みたそれらの、あまりにも馬鹿さ加減と。触れた温もりとその感  
触の記憶から湧き上がるものの熱に、浮かされるようすで。

片手で口元を覆うと、座り込んだまま、しばらく動くことができな  
かった。

### 3・無意識のゼロセンチ

気が付けば隣にいた。

振り返れば微笑んでいた。

はじけるような笑顔で、駆け寄って、飛びついてくる。

それが、当たり前のことだった。

「……………どうしたらいいんでしょうねえ」

つい、弱音を零せば、聞きとがめたのかちらりと母の視線がこちらに向く。

どことなく冷たいその視線の意味は、問うまでもないだろう。

はっきりと聞いてくればいいものを、聞かないところがあるがたいのかたちが悪いのか、判断に困るところだ。

なかなか会えない、と、思っていたけれど。

より一層会えなくなるとは、どういうことなのだろう。

以前であれば、何かと自分がないときでも、この家に来ていたというのに、その行動がぱたりと途絶えた。

さらに言えば、遠目で見かけることがあったとしても、彼女はこちらなど知らぬ風情で、するりと自宅へ帰ってしまう。

文字通り、避けられている。

頭を抱えて唸りたくなるが、そんな行動をとれば、目の前の母の思っつばである。

まあ、それでも、こうして何気なく実家に帰ってくる回数が増えた息子と、訪ねてくる回数の減った隣家の娘と、考え合わせれば何らかの答えはもっているのかもしれない。

ぼんやりとリビングに居座る自分を、多少うっとおしいそんな視線を向けつつも、放置していてくれるのだから。

「まったく。少しは手伝いなさいな、でかい図体していい年して」

そうでもなかった。キッチンに立って料理をしながら、ぼそりつぶやかれた言葉は、とりあえず聞かなかったことにして、立ち上がると冷蔵庫へ向かう。

飲んでないとやってられないよな、と、冷蔵庫を開けると、ビールと発泡酒が並んでいた。迷わずビールを取ろうとしたところで、さえばしで手をたたかれる。

「っ、なにを」

「誰がビールとっていいといった。それは父さんの。あんたは発泡酒で十分」

ほれほれと発泡酒を押し付けられ、どこか理不尽な気分で見をしかめれば、ふんと、母に鼻で笑われる。

「もっと売れっ子になったらビールでもいいウイスキーでも飲ませてやるわよ。ああ、それ以前にもっと甲斐性がついてからかしら」

おほほほ、と、軽やかにわざとらしい笑い声をあげる母に、ため息が漏れる。

かなり、いろいろとご機嫌がよろしくないようだ。母は彼女が気に

入っていた。訪ねてくる彼女が、ほとんど最近顔をみせないとなると、不満もあるのだろう。ここは甘んじて受けるべきか、と、缶を片手にテーブルへ戻る。

と。

チャイムが鳴る。

客か？　もしかして？　とそちらを見れば、手が離せないらしい母がさえばしでそちらを指し示す。

「あー、あなた、出て」

しょうがない、というそぶりを見せつつも、心臓になる。もしかして。もしかしたら、彼女が来たのではないだろうか。

年甲斐もなく煽る心臓をなだめつつ、少し小走りになりながら向かった玄関で、扉を勢いよく開けば、驚いたように目を見開く彼女がそこにいた。

「あ……」

茫然と、しかしどこか今にも逃げ出しそうな彼女に、焦る。

「……………久しぶりですね」

もっとうとう、ほかにないのか、と、自分に情けなくなりながらも言葉を継げれば、彼女が焦ったように手に持っていた荷物を渡してくる。

「あ、あの、これ。かーさんから。おすそ分けとあと、回覧板！」

ぐい、と押し付けるように渡されたそれを、思わず受け取れば、彼女はそのまま、頭を下げた。

「じ、じゃあ。おじやましました！」

「あ、待ってください」

逃げるように去ろうとする彼女を、引き止める。謝罪したい気持ちや、伝えたいけれど伝えられない思い。思わずつめた距離は、かなり近くて、そう、あと少し手を伸ばせば、抱きしめることができるほどの距離で。誘惑に、心が揺らぐ。

けれど。

そんな自分の気持ちなど、彼女は知る由も、なく。

はじかれるように、彼女が視線を合わせぬまま、言葉を紡ぐ。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ちゃん忙しいのに、なんか邪魔ばつかで。うん、だいじょうぶ、私は平気だし、うん。あ、友達にいわれたんだ、新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもうんだ！ だから、うん。いまままでありがとうね、お兄ちゃん！」

何も、いえなかった。やめろ、と、言う資格が、自分にあるのか、とか、邪魔じゃない、とか、言いたいことはいっぱいあるはずなのに、言葉にならなくて。きりきりと、胸の奥に、差し込むような痛

みを覚えた。

そうじゃない、好きなんだ。誰よりも大事なんだ。抱きしめて、そう伝えたい。けれど。見守るんじゃないのか、とか、彼女も変わるうとしてるんじゃないのか、とか、彼女の行動を止める権利が自分にあるのか、とか、次々と言葉が浮かんで消えていく。

ゆっくりと、距離を取る。

さっきまでは、0に近い距離。今は、少し遠い。

深く深く、深呼吸をして、動揺を鎮める。せめて、愚かな思いを隠しきれるように、と、それを願いながら、言葉を紡ぐ。

「あなたの気持ちは、よくわかりました。引き止めて済みません。おばさんにお礼いっておいてくださいね」

彼女の顔を、みる事ができなくて。

そのまま、静かに扉を閉じる。

手の中のお裾分けは、ほんのりと暖かくて、それが最後のつながりのようで、思わず強く、握りしめた。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

だけど　自分は、どこで間違ってしまったんだろう。

答えは、まだ、見つかりそうになかった。



#### 4・きみの心に触れさせて

どうすればいいのか、なんて、答えがわかっていれば間違っことはなかった。

わからないからこそ、間違ってしまう。それが、人間というものなのだろう。

物語の中で、自分が綴ってきた人物たちのことを思う。

何もかもをわかって綴っていた、自分は、もしかしたらいつのまにか、現実ですら心の中を見透かせるような気がしていたのだろうか。そんな愚かな自分を笑ったところで、何が変わるわけでもないのだ。

会いたい。会いたい。けれど、会って何を言えたいのだろうか。どういえばいい。どう説明すればいい。そもそも、何を伝えるというのだ。

好きだと。好きなのだと、今の自分に伝えられるだろうか。それが許されるだろうか。

ぐるぐると堂々巡りの中、仕事は容赦なく襲ってくる。

締切がこんな時に重なるなんて、と、多少の苛立ちに紛れて、ひたすらに文章を書くことに没頭した。

不意に襲ってくる、切なさとの笑顔の面影を、振り払うように。

会わなければ薄れる思いなら、それだけのことなのだと、痛感させ

られる。

集中が途切れた瞬間、彼女の泣き顔と言葉が、浮かんでは消えていく。

少し前ならば、会いたいと思う間もなく、彼女はそばにいた。

少し放っておいてくれないか、と、言ってしまいそうなくらいに、傍にいた。

今は、いない。

会うことも、ない。

恋愛ごっこならよそでやりなさい。

自分の言った言葉が、自分に跳ね返ってくる。

決めつけてそう告げた言葉は、確かに苦肉の策から出たものであったけれど、それは言っではならない言葉だった。彼女の想いを、気持ち、勝手に決めつけてはねのけてしまった、言葉だった。

ふいに、不安がよぎる。

新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもってるんだ！

もう、遅いのか。今頃、こうして必死で仕事をしている間にも、彼女はすでに新しい恋を見つけてしまっているのかもしれない。もう、自分のことなど、忘れてしまっているのかもしれない。

それでいい、と、思っていたはずだった。

自分に一直線に向かい続ける思いだけではなく、いろんな感情を知り、いろんな出会いをしていってほしい、と、そう願っていたはず

だった。つい先日までは、それでいいと、耐えられる、と、思っていた。

しかし、今のこのざまは何だろう。

想像するだけで、身を焼かれるようで、自分の中にこれほどの激情が眠っていたのか、と、不思議にすら思える。

独占欲。嫉妬。どろどろと醜くも人らしい感情に、苦く笑いが漏れた。

どんなにあせろうが気になろうが、仕事は待つてはくれない。

締切が片付くまでのひと月。丸々とひと月とちよっと。仕事場から外に出ることもかなわず、ほぼ缶詰状態となってしまった。よほど切羽詰まっていたのか、鬼気迫る形相と、その思いの丈を昇華しぶつけられて生まれた作品が、予想外に編集に好評価だったのは、思いがけない幸運だった。

やっと解放された、日曜の昼間。

一度、隣家に訪ねていったものの、彼女は出かけていた。ニヤニヤと隣のおばさんが告げた言葉に、嫌な予感がするものの、そのまま実家に帰る気にもならず、ふらりと、街へと足を向けた。

だからといって、何か用事があるわけでもない。ふらりふらりと人間を眺めながら、本屋でも向かうか、と、思っていた時だった。

「……おや」

叫びださなかったのは、年のたまものだと思いたい。

視線の先、同年代の少年と二人、並んで歩く彼女がいた。どこか初々しい雰囲気二人は、そう、はたから見ればどこまでもお似合い

で　じりり、と胸の奥が焼け付く。

こちらに気づいて、驚いたように目を見張る彼女に、ゆっくりと歩み寄る。わざと不思議そうな表情をして、自然になるようにと心がけながら近づいて、やっと隣にいる少年に気づいたそぶりを見せる。どこかと惑うように頭を下げる少年に、こちらも礼を返しながらかつそりと観察をする。若い。当たり前だけれど、若く、そして、頭も悪くない。こちらをどこか訝しく見つめる視線は、すでにこちらをライバルだと見極めているようだった。

「…………デート、ですか」

しばし落ちた沈黙を破るように口を開けば、はじかれるように彼女が顔をあげる。見つめる先で、視線が不安そうに揺らぎ、困惑したように視線を話迷わせはじめ。

いじめるつもりではないのだから、と、さらに口を開こうとすれば、ぐい、と、彼女の体がひっぱられた。

見れば、少年がこちらを強く強く睨み付けながら、彼女を引き寄せていた。　瞬間的に引きはがしそうになるのを、必死にこらえる。

「デートです。失礼します」

ぺこり、と、再び少年は頭を下げると彼女を引っ張るようにしながら、その場を離れていく。

「あ、え、ちょ。う、おにいちゃ、またね」

振り返りながら告げる彼女の言葉を聞きながら、引き止めることもできたけれど、素直に見送る。

焼け付くような思いが、胸を焦がすけれど、それでも、もし、彼女

があの少年を選ぶというのならば　幸せになれるのであれば、祝うしかないじゃないか。

引き寄せたくて伸ばしかけた掌を、強く、強く握りしめた。

それでも、未練がましいのは、情けないが性分だろう。

ゆっくりと時間をつぶす様なペースで実家へと帰り、玄関前で立ち止まり、隣家を眺める。

あのままデートを続けたならば、まだ半分帰ってこないだろう。初々しい雰囲気から、どうこうという関係にまでにはなっていないかもしれないが　と、想像しかけてあまりの胸糞悪さに強く頭を振ってそれを追い払う。

口の中だけで、らしくなく低く悪態を漏らして、ため息をつく。

あきらめが肝心じゃないか、と、自分に言い聞かせるように呟いて、門扉に手をかける。

と。

気になって、振り返れば、遠くに人影がみえる。どこか消沈した風情で、とぼとぼと見るからにおぼつかない足取りで、ゆっくりとこちらへ向かってきている。

見間違えるはずなんか、なかった。

あわてて傍に駆け寄る。うつむいて歩いている彼女は、こちらに気づかず、目の前まできてやっと、顔をあげた。

その表情が、まるで今にも泣きだしそうで、まさかという思いから怒りがわき起る。

「おにい、ちや」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないんですか？        そんな、今にも泣きそうな顔して」

自然と手が伸びる。ほほをたどり、涙が零れ落ちそうな目じりをめぐう。その指の動きにのままに閉ざされる瞳に、誘われるような気がして、そのまま唇を奪いたい衝動を、必死でこらえる。

やがて、我に返ったように、彼女が身を離す。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何も無いもの」

一步。彼女の離れた距離、これが、今の彼女が感じている距離なのか。

「ちょっと、喧嘩しただけだよ。付き合ってるんだから、そんなこともあるよね」

歪んだ笑顔を浮かべ、必死で言い募る彼女は、気づいているのだろうか。

「だ、だから、大丈夫よ。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。私ももう高校生だよー」

彼女の、癖。嘘をつくときは、少しだけ、瞬きが増えることを。

必死に虚勢を張りながら、どこか歪んだ笑顔を浮かべ、小さく笑いを漏らす彼女をみていると 耐えられなかった。

抱きしめていた。小さな彼女を、泣き出しそうになりながらも微笑む彼女を、そのままにしておけなかった。

彼女の香りが、伝わる。温もりが伝わる。小さな体、しかし、すでに成長した、女性であるその体を、労わるように抱きしめる。硬直していた彼女は、やがてあわてたようにそこからぬけだそうと、するから。

より一層、強く抱きしめた。

無理しなくていいから、そんな風に頑張らなくていいんだ。謝ってすむならば、いくらでもあやまるから、どうかごまかせないでくれ。どうか、隠さないでくれ。

ありのままの、君の心を、見せてほしい。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。ごまかせると思っんじゃないありませんよ」

ただ、それだけを願いながら、抱きしめたまま、彼女の耳にそっと囁いた。

## 5・狼まであと何秒？

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。

愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

だけど、みすみすほかの男にかっさらわれるなんて、指をくわえて見ていられるわけがない。

一度は、彼女が幸せになるなら、などと、物わかりのいい大人ぶって諦めようとしたことなど、記憶の奥底へ沈めこんで、今はただ、抱きしめた。やっと、この腕の中に困うことのできた温もりを、確かめるように抱きしめ続けた。

幸せになるならいい。

けれど、こんな顔をさせる相手になど、誰がくれてやるものか。

伝わる温もりが、ジワリと体の熱を煽る。普段はあまり強く脈打つことのない心臓が、拍動しているようで、その余裕のなさが彼女に伝わりはしないかと、不安がよぎる。けれど、それでも、彼女を抱きしめる手を緩める気はなかった。離すことなど、できなかった。

そうだ。

彼女が欲しい。

どれだけ言い訳しようと、大人ぶろうと、言葉を重ねようと、結局はそういうことなのだ。

今、腕の中にある彼女の温もりが、愛しくて、身じろぐ彼女を閉じ込めるように、強く、抱きしめた。

触れる腕から伝わる柔らかさと、その香りに、改めて彼女がもう少女から脱皮しようとしている年頃なのだと痛感する。特に香水などをつけているわけじゃないだろうに、なぜこんなに甘く香るのか。人は、お互いに求め合う相手の香りを心地よく感じるという。ならば、彼女は、自分にとって最良の相手なのだろうか。

油断すると、手が彷徨いそうになるのを、思考を巡らせることでとどめる。不埒な思いは、今はまだ封じておかなければならない。けれど、ああ、男はオオカミなのだ、などと、使い古されたフレーズを使うまでもなく、間違いなく今、無意識の誘惑に振り回されているのだ。

けれど。

「……っ、ないで、るんですか」

すすり泣くような声が聞こえて、焦りながら少し力を緩めれば、涙が目元から零れ落ちるところだった。成長したとはいえいまだまるさを残す少女めいた頬を、静かに涙が伝う。綺麗だ、と、目が離せない。泣いている、泣かせた、という意識よりも、その、涙の流れる様に、目を奪われた。

見つめる先、彼女はその視線を避けるように目を伏せる。ああ、隠れてしまった。そっと覗き込むようにすればむずがるように無意識にか首を振る。鼻をすすするような音に、胸が軋む。

「なかないで、ください」

途切れ途切れに告げた言葉は、どこか掠れてしまっていた。そつと、その涙をぬぐおうと手を伸ばせば、びくりと彼女は、それを避けた。思わず、息をのむ。拒否されたことで、胸が痛みを増した。

「ひどいよ、おにいちゃん……」

うつむいたままの彼女がつぶやく。ひどく掠れたその声は、苦しうに吐き出された。そして、勢いよく顔をあげた彼女は、涙にぬれる顔をそのままに、こちらを睨み付けながら叫んだ。

「ひどいよ、どうして、どうして、優しくするのよ。恋愛<sup>こころ</sup>こころで、子供って……いったじゃない！ 私なんか、邪魔なんでしょう？！ だったら、優しくしないでよ！ 構わないでよ、お兄ちゃんのお兄ちゃん……っ、ばかあ！ お兄ちゃんなんて、だいき……っ」

最後まで聞かず、再び強く抱きしめる。強く強く、彼女を支えるように、そして　まるで自分がすがりつくかのように。

胸が痛む。心臓が、激しく脈打つ。頭が真っ白で、血が上っているのか引いているのかわからない。わかるのは、自分が愚かだということ、そして、彼女を傷つけていたという事実だった。

腕の中で震える彼女を、ただ抱きしめる。体をこわばらせていた彼女が、やがて少しだけ力を抜いて、ぎゅ、とこちらのシャツをつかんできて、再び心臓が激しく脈打つ。

「……すみません」

声が震える。まるで吐息のような言葉を、抱きしめた彼女の耳元で

ささやくように告げる。ひとつ息をついて、少しだけ腕の力を緩めるけれど、彼女は胸に顔を隠す様に埋めたままだった。

「なにを、あやまつてるの。離して、もう、迷惑かけない、から」

震える声が告げる言葉に、苦しくなる。

違うんだ。そうじゃないんだ。本当は　。

湧き上がる想いのまま、素直に言葉を紡ぐ。

16歳。結婚はできるけれど、まだ法令に保護される年齢であること、そして、あと3年、待つつもりだったこと。

ぽかん、と見返す彼女の顔をまっすぐ見られなくて、視線をそらす。

「小さいころから、まっすぐ自分に向かってきてくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。それに魅了されない男がいると思いますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐたくて心地よくて、愛しくて　　だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

せめて高校を卒業してから、それからゆっくりと、時間をかけられれば、と思っていた。本当にお互いを思いあうのなら、それでもいいだろうなどと、思われる余裕からか、勝手に判断していたのは愚かな自分だった。

「……お、にいちゃ、ん」

どこかまだ、茫然とした様子で見返す彼女に、一つ深呼吸して微笑む。

そう、愚かだった自分は、もしかすると年齢差を言い訳に、逃げて

ただけかもしれない。そう、彼女に間違いなく感じる愚かな劣情を、相手が幼いのだからと言いつつ、逃げていたのかもしれない。

もう、間違わない。

「好きですよ。大好きです。だから、誰にも触れさせないで。僕のものでいてください」

ゆっくりと柔らかな彼女の髪を撫でる。茫然としていた彼女の顔が、じわりじわりと驚きへと変わり、次第に朱に染まっていく。そのさまが、愛らしくて愛しくて。口づけたい、と、思う気持ちを、ねじり伏せる。

「……すぎ」

返された言葉は、ずっと何度も聞いていたにもかかわらず、今までに聞いたどの言葉よりも、心を満たしてくれた。

緊張の糸が切れたように泣き出した彼女を抱きしめて宥めながら、静かに、手の中にある幸運をかみしめたのだった。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

「そ、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに普段めつたに泣かないし！」

「そうなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるところを見る気がしますよ」

「き、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なしにしませんか？」

「っ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……鋭意努力します！」

そう、早く、名前で呼んで。

待ってられるのは、あと少し。理性はもう、ぎりぎりの綱渡りなのだから。

今まで待った時間が長いから、これからもまだ大丈夫。

けれど。

「……期待、してますよ」

眠れる狼が目覚めないように、どうか、気を付けて。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。  
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。  
簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

けれど、大切だからこそ、失えるわけがなかった。

愛も恋も、関係ない。

君が唯一の、大切な人。

f i n

1. そんなに見つめられたら、貴女を好きになってしまいます。

いい人生だった、などと言うつもりは毛頭ない。

気が付けば80年、独り身で生きてきた。

さみしくないのなどと、親切ごかして言ってくる輩も、最後の方は何もいわなんだ。

いや、言ってくる連中ににじむのは、優越感と、そして自らもすでに忘れ去られた老人であるというさみしさだろうか。

まあ、人のことなんぞ、知ったことじゃない。

末は独居老人の孤独死か、見つけてくれる人間に当てがない以上腐敗がひどくならねばいいが、などと思っていたのだが、ありがたいことにどうやら病院で死ねるらしい。

大丈夫ですよ、頑張ってくださいなどと言ってくる看護師に、死ぬ人間に何を言うか、誰が今更頑張らねばならんと返せば、どうやら扱いにくい患者と認識されたらしく、必要最低限になったのはある意味幸いだった。

次第に意識が遠くなる。すでに痛み止めの薬をぎりぎりまで使っている現状、もともと朦朧とした意識であったが、最後に多少思考できたのはありがたい。

いい人生だった、などと言うつもりはない。

女一人、生きてきた人生の終わりなど、こんなものであろう。

そう。

終わりのはずで、あったのだが。

気が付けば、白い空間に存在していた。

死んだはずだ、と、しばし思考にとらわれるが、やがて呼ぶ声が聞こえた。

生前の名前、そう、それに間違いない呼び声に、顔を上げる。

白い空間に白い幽霊がいた。怪しすぎる。何かの呪いか、マジックか。大がかりな設定で騙す気だろうと、訝しく睨んでいれば、目の前の幽霊がもじもじと揺らいだ。妙に気持ち悪い動きだったために、思わず後ずさる。いかん、たいていのことには動揺せぬようになってたとおもっていたが、悶える幽霊はさすがに気持ち悪い。

ぐらりと、体が揺らげば、幽霊がよろりとのびてきて、抱き留めてくれた。抱き留めてくれたのはいいのだが、その動きが何やら怪しい。気持ち悪くなって、強く振り払えば、すすすと再び元の位置に戻っていく。

なんだ、この幽霊は変態か、思わず思考すれば、ふるふると幽霊が揺れる。

「違いますよ、転んだら危ないと思って支えていたんです」

支えるのにつごめく必要があるのか、と、その言い分を無視していたならば、ごまかす様にふるんふるんと二度震えた。

「お願いがあるのです」

幽霊が告げる。

「断る」

「そこを何とか」

「断……る」

くらり、と思考がぶれる。なんだこれは。意識の中に何かが存在しているような、かき回されているような 酔わされているような、そんな感覚が襲ってくる。ぐるぐると回る脳内を喝をいれて落ち着かせる。なんだこれは、まるで洗脳のような、と、そこまで考えた時だった。

「洗脳なんてとんでもない……ただの催眠です。」

よし、どうやら目の前にいる幽霊は、果てしない変態らしい。思考を読むなどと、変態の所業に違いない。激しく蔑んだ視線を向けていれば、それすらも無視して、とうとうと幽霊は語り始めた。

「あなたには、ある世界へと転生していただきます。なにせ、80年間清らかな乙女であった魂など、いまどきなかなかありません。さいきんの若い娘たちはどうにも、そのあたりが緩やかでして。いえ、愛の形はどうであろうとかまわないのですけれどね、聖女や巫女として召喚するのに、なかなかそのあたりが難しく。だから、どうしても若い娘さんを召喚することになるんですが、そうになると今度は転生や召喚された後に、周囲のだれかとくっついてしまうんですよねえ。それじゃ聖女や巫女として送り出す意味がない。ゆえに！ このたび、あなたのような清らかな女性の魂を選び出し、厳

選して転生させることに決まったのです。というわけで、向こうの世界をどうかよろしく願いますね。とりあえず、そこその年齢の成長した体に転生していただきますのでー。あ、そうですね、16くらいでいかがでしょう。では、どうぞ、いい異世界ライフ並びに、いいお仕事をお願いいたしますー」

こちらの視線をもるともせず、一息だった。ひとの拒否すらも聞かず押し付ける変態か。死ねばいいのに、と、蔑みを一層強くすれば、再びもじもじと幽霊が悶え始める。

「そんなに見つめられたら、貴女を好きになってしまいます。」  
あほらしい。

半眼になってしまったのに気づいたか、幽霊は気を取り直したように？ まっすぐになると、次第に光り始めた。

「それでは、異世界にいつてらっしゃいませー。あとはよろしくお願いますねー」

次第に強くなる光に視界を奪われながら、思わず目を閉じるとふわりと体の浮く感覚がし始める。

だんだんとそれに伴い、薄れていく意識の端で、幽霊が挨拶するように揺れるのが見えた。

「あ、そうそう、多少人より好かれやすい体質になりますのでお気をつけてー」

いらんがな。

というか、いつの間に行くことになった。とるんだ。

そんな思いなど、どこ吹く風。

こうして、私は、死と共に今まで生きた世界へ別れを告げ、わけのわからぬ幽霊のいうがままに、知らぬ世界へと旅立つのだった。

「……いやあ、男性の30代超えて魔法使いとかその上の大賢者っていうのは割といるんですけどねえ。この場合、なんと呼べばいいのやじ」

白い空間にぽつんと残された幽霊の、つぶやくような声だけがあたりを響いていた。



かったことを思い出し、余計しかめ面になる。この癖のおかげで晩年、顔が皺だらけだったのだが、まあ、今は若いらしいのでよいことにしておこう。

さて、どうしたものか。

このままここにいっても仕方がないのだが、と、睥睨しながら思索した。

こちらが思索している間に、どうやらあちらも思索しひそひそと相談をしていたようだった。ひそひそと隠れるように言葉を交わすのは、一番偉そうな男とそこそこえらそうなまるで神職のような格好の男だ。神職といっても日本のそれではなく、なんとなく神職のようだ、という区別なのだが。

やがて話がまとまったのか、えらそうな男が一步前に出てくる。身長が高い。2 m近いのではあるまいか。生前の身長は当時にしては高めの160近かったのだが、不思議なもので年を取るにしたがって縮んでいったから、150cm半ばだろうか。今の身長は、ざっと逆算するに生前、若いころに近いようだ。それでも、見上げる位置にあるそのえらそうな男の顔を、睨むように見上げれば、男はたじろいだ様に目を見開く。なんぞ、この顔が醜いのだろうかと、思わず顔に手を当てれば、男の表情がとろりと溶けた。……あまりその変化の様子に、背筋に毛虫がはったような感覚を覚えて後ずさる。あの例の幽霊よりも気持ち悪い。あの幽霊もたいがい気持ち悪かったが、それ以上だ。

男はそんな様子も気にならぬように、とろけた顔のまま、じわりじわりとこちらに近づいてくる。それにつられるように睨み付けるまま、じわりじわりと後ずされば、次第に人垣が割れ、壁際まで追いやられていた。おお、なんとということだ、大の男が（おそらく）小

娘に向かってそのような所業をするなど。

「いい加減にしとくれ！　　いったいなんだっていうんだい」

叫ぶように告げれば、男は宥めるかのように頷いて、ゆっくりと手を伸ばしてきた。どこかうつとりとした表情のまま男が伸ばす手を眺めていると、そのまま頬に触れようとしていて、思わず叩き落とす。

「x x ……！？」

「簡単に触るんじゃないよ！　　気持ち悪いつたらありやしない、なんだいここは、礼儀もへつたくれもあつたもんじゃないね」

腕を組んでふん、と、鼻をならせば、後ろから例の神職のような人が現れ、えらそうな男に何か言ったかと思うと、一歩前に進み出てこちらに向かって身振り手振りで何かを伝えている。

「x x、x x x x x x！　　x x x x ……x x！」

しらんがな。

わからん言葉で言われたところでわかるわけがない。眉間にしわを寄せただ首を振ってやる。茫然とする神職らしき男に、えらそうな男が一言告げる。驚いたように神職が振り返り、一瞬否定らしき声をあげたが、やがて声が小さくなり、諦めたように頷いた。そして

えらそうな男は、えらく威張ったような得意げな顔、ああ、生前に聞いたどや顔というのはこういうものだろうか、をこちらに向けて一言何かを告げた。だからわからんというに。そして、そのままぐ

つと身を寄せて、顔を近づけたと思ったら、顔を寄せてきた。……  
なにをするか、この変態が！

力一杯、男を張り飛ばす。本来ならば少し揺らぐかどうかであった  
だろうが、なぜかその威力は、絶大だった。男はすつとんだ。なん  
ぞ?! と、やった自分も驚いた。周囲は茫然、飛ばされた男も茫  
然とこちらをみている。うむ、やりすぎたか。えらそうな男である  
以上、えらいのである。うむ、やりすぎたか。えらそうな男である  
ずいかもしれぬ。だが、そうたやすく唇を許すほど、落ちぶれては  
おらぬ。あれは初恋の遠き淡い思い出の太郎さんにささげた大切な  
もの、そのあと一切縁がなかったとはいえ、それ以外にささげる気  
は微塵もない。

一瞬の躊躇ののち、しかし再び睨み付けていると、えらそうな男に  
騎士が駆け寄り、周囲を囲む。そしてそいつらが、手に持った剣や  
槍をこちらに向けてきた。まあ、こうなるわな。こりやどうするか  
と、思案する。しかし、あの幽霊め、とんでもないところに飛ばし  
やがって。今度あつたら張り倒してやらねばならん、と、思ってい  
たところに、である。

「呼びました？」

ひよこ、と、白い幽霊。否、白い幽霊と同じ声の、光る人間が現れ  
た。なんだこれは、と、見れば、周囲のえらそうな男ども一派が、  
どよどよとどよめいて額づいて礼をはじめ。おやどついうことだ  
と、幽霊に視線をむければ、輝くような笑顔を返された。

「僕に会いたかったって、正直に言ってしまうていいんですよ。」

ふ、と笑いが漏れる。そうだ、笑顔だ、久々に笑顔が浮かんだな、

と、我ながらどうなのかと思うようなことを考えながら、元幽霊をみやる。

「会いたかった。殴り倒すために、な」

そのままの勢いで平手を大きく振りかぶるが、するりとよけられて、そのまま嬉しそうに抱き留められる。

「ああ、あなたから飛び込んでくれるなんて。危機的状況まで待ったかがありました」

なんだそれは。ふざけるでない、と、内心舌打ちしながら睨みあげれば、嬉しそうにどこかしこと撫でさすりながら微笑む元幽霊の姿。

「どういう意味だ、なんだ、今まで様子をみていたとでもいうのか」  
振り払いながら言えば、元幽霊は、照れたように視線をそらす。

「男のロマンについて研究しているだけです。危機的状況に落ちいった情勢を助ける、ありがとございます！あなたにずっとついていくわ！という展開、ロマンじゃないですか」

ありえん。

毛虫を見るような目で見つめれば、もじもじと身じろぐ元幽霊。気持ち悪い。幽霊の時でさえ気持ち悪かったのが、より一層気持ち悪くなっている。これどうしてくれよう、と、思っていると、やっと気を取り直したのか、元幽霊が説明を始めた。

「実は、ぼくは神様なんです」

どうやら、元幽霊は頭がおかしかったらしい。  
気の毒そうな目で見つめれば、ぽっと頬を染めて身悶える、自称神様。いや、気持ち悪い以外ないから、話を勧めてくれ。

「で、この世界が僕が作った世界ですね。で、あなたは聖女。本来、この世界の人間と何らかの形で交わることで言葉がわかるようになるのですが……あなたにはそれをやってもらおうと困ります。ので、言葉わからないままでがんばってください。あと、すべきことです。が、またそれは後日お知らせしますね。なにはともあれ、この世界で、のんびり清らかに生活してください。頑張ってくださいね」

「……帰りたいたいが」

「無理です、諦めてください」

深くため息をつく。はてさて、どうしたものか。どうしようもないのだが。

ちらり、と、床に伏せている男どもを見やれば、ちらりちらりと気になるのかこちらをみている。視線がぱちり、とえらそうな男に合えば、ぽっと頬を染めた。きもち悪い。大の男の所業ではない。

「……いろいろとこの世界、間違ってないか？」

「諦めてください」

にこやかなままの自称神の答えに、脱力感が襲う。何はともあれ、このままこの世界で頑張るしかないらしい。

やがて、自称神は振り返ると、床に伏せた男たちにごいごいによも

じよもじよと何事かを告げた。ははーと、ありがたそうにそれを聞く男どもだが、言葉がわからないこちらにはなんのことやらわからない。まあよかろう、と、待っていていれば、振り返って自称神が言う。

「それでは、彼らがこれからの生活の世話をしてくれますので。頑張ってくださいね。それに、そろそろアレが効いて来る頃ですね。ええ、きつとあなたなら大丈夫。検討を期待してます。それではまた！」

にこやかに手を振れば、自称神は光に包まれて消えていった。

……いろいろと、だな。頑張れってなにをだ、とか、アレってなんだ、とか。わからないことがあるのだけれども、恐る恐るとこちらに近づいてきて礼を取る男どもが、身振り手振りでどこその部屋に案内しようとしているようなので、とりあえずついて行ってみることにする。

なにやら、その男どもの眼が、どうにも気持ち悪い気がするのだが、とりあえずは気にしないことにしておく。気にしたらいろいろ終わりな気がするの、気のせいだろうか。

次、あの自称神にあつたら、必ず殴る、と、心に決めて、どこか気持ち悪い桃色な空気を醸し出す男どもに連れられて、その怪しげな部屋を後にしたのだった。

### 3・僕のために恥ずかしがる貴女が、とても愛しく思えるんです。

丁寧に案内された部屋は、思わずたじろいでしまいかねないほどの豪華さで、今まで六畳2間のアパートにおいて人生の大半を過ごしてきた身としては一瞬足が止まった。いやいや、貧乏性というなかれ、女一人、一生働いたところで老後もらえる年金なんぞすずめの涙。貯金は当然しつかりしてはいたが、それでも無駄遣いなどできるものではなかった。老後に豪遊生活何ぞ夢また夢、悠々自適ではあったが質素な生活を送っていたのだ。

しかしながら、こちらが躊躇する様を見せたところで何が変わるでもない。言葉が通じない故に、不思議そうにこちらを伺うばかりで事態が何か進むでもない。それならば時間を無駄にするよりもさっさと行動するに限ると部屋に足を踏み入れた。

促されるままにソファへ腰を下ろし、紹介するかのように綺麗な揃いの身なりの娘たちを紹介される。促されるままにこちらに向かいもごもごと何事かを言っては頭を下げ、を交互に繰り返していくのが3人、どうやらこの者たちが世話係らしい。世話係など、多少体の自由が利かなくなつた人生の最後の頃に世話になつたヘルパーさんたちしか記憶にない。一生を通して大病することなくほどほどで生きてこられたが故の僥倖ともいえるであろうが、そのヘルパーさんらが入るまでも苦勞をした。まず、最初に来たケアマネージャーなるものがえらく若く、若いだけならばよいのだが人をぼけ老人扱いしおる。最初からその対応だつたが故に、きつちりとその総括のところ連絡を入れれば変えてもらえたが、その後のヘルパーも数名、こちらの性格がねじ曲がつてるからか、勤められないと変わつていった。はてさてこの娘たちはどれほどの根性があるものか、と、目を向ければ、ぽつと恥じらうように頬を染める娘たち。

……なにごとぞ。

もしや、男だけではないのか、と、すでに諦念を含んだ想いでため息を漏らせば、ここまで案内してきた男がどこか名残惜しそうに退室し、娘たちが動き始めた。一人はお茶の用意をはじめ、一人は隣の部屋へと向かう。残りの一人が隣に控えていれば、やがて何ともよい香りが漂い始めた。お茶はどうやら紅茶の類らしい。嫌いではないが、贅沢をいうならば緑茶が欲しかった。さすがにこの世界にあるのかどうかは知らんが、そのうちあの幽霊、ではなかった、自称神とかいう存在が本当に神ならば、用意させるのもやぶさかではなからう。用意されたお茶を横目で見つつ、娘たちを観察してれば、恥じらいつつも要領よく動くさまが目に残る。なるほど、有能な娘たちらしいと、茶をいただいていれば、隣に向かったらしい娘が、ドレスと鏡、くしなどを手に戻ってきた。というかよくそれだけ持てるものだ、と、感心していれば、何やらいじりたいらしいよからう、と、寛容な気分になって、頷けば、髪をくしけずられ結われ、化粧をしようともされたがそれは断固として断った。

さて、と、鏡を渡されて、うむうむと覗き見て、驚いた。

誰だこれは。

いや、確かに若いころの顔形によく似てはいるが、色が違う。黒髪茶色の眼、普通の日本人の色彩であったはずの容姿が、金色に薄紅がかつた髪色に深い空色の瞳に変わっているではないか。若いころはこれでも美人であったのだよ。だからこそ、寄ってくる男どもにうんざりして徹底的に男性拒否するようになってしまったのだがな。茫然と眺めていれば、心配したかのように声がかかる。いやいかん、

これくらいのこと動揺するとは修業が足りぬ、と、さすがにあとから考えれば動揺せぬ方がおかしいとわかるようなことを無理やり考えて、頷く。

勧められるままに、健康であるのに介助を受けながら湯を使い、着替え、髪を結えば、感嘆の声が上がった。いや、なんというか。飾る必要などないだろうに、と、深く眉間にしわを寄せれば、困ったようにおろおろ彷徨う娘たち。何ともやりづらい。とりあえず大仰に髪に飾られた花をはずし、いくらか地味に変える。ドレスは、まだまだ納得はいかないが一番地味なものを選んだのだから致し方あるまい。

こうして、着替えを終えたのち、食事らしい様子で別の部屋に案内される。……なんと面倒な事よ。しかし多少は融通するのもよからう。我を通すのは状況が見えてから、今はまだ少しばかりおとなしくしておいて損はなからう。案内されるままに向かったのは食堂らしき部屋、すでに席には先だつての王らしき男とその側近らしき男、神職のような男が座っており、周囲には人が控えている。こんな人の多い中で飯を食えというのか、と、不快を顔にあらわにしつつも、進められてしぶしぶと席に着く。

「x x …… x x x ……？」

わからんというところ。

とにかく食事だ、と、手を合わせ小さくいただきますとそれだけはきちんと告げると、3又のフォークのようなものを使い、切り分けられた料理をいただいていく。正直脂っこい、というか、味が無駄に濃い。年よりの常で塩気の多いものを好んではきたが、これはあんまりだ。眉を寄せていくらか食べられそうなものをつまんで食事

を終えれば、じつと向けられる多くの眼があった。

何ぞ文句でもあるのか、と睨み付ければ、伝わったのか首を振る。

食事の途中で席を立つのはあまり行儀のよろしい行為ではなからうが、これ以上は不要であつたゆえに、そこで再び手を合わせ席を立つ。なにやらほにやほにやと言っていたが、引き止めているような気配ではあつたが、知ったことか。微妙に注がれる視線に熱がこもつてるのに気づかないとでも思つたか。そんな視線の中に長くいる筋合も趣味もない。さつさと部屋へと引き上げるに限るのだ。

部屋に戻ったら、再び湯あみし薄物の夜着に着替え、娘たちはてきぱきと働いて寢室へ案内すると一礼して扉を閉め去って行った。

はてさて。

思わず扉を覗む。いやな予感しかせぬのはなぜだろうね。周囲を見渡せば、動かせそうな家具がいくつかあつたため、サイドボードのようなものと、椅子、その他もろもろを扉の前へ移動し、封鎖する。これでよからう、と、安心してベッドに向かう。やれやれ、天蓋つきの寝台など、若い娘の夢物語だけの話だとおもっていたのだが。妙にふかふかとして柔らかすぎる寝台へと身を横たえつつ、腰を痛めねばいいかと、そんなことを考えながら眠りについた。

目が覚めると、朝方だった。

「おはようございます」

何故に居る。

目の前でにこやかに微笑む自称神を半眼で睨みつつ、礼儀として薄物しかつけてない身をスーツにくるむ。とたんに脂下がる自称神。この変態が。

「いえ、僕のために恥ずかしがる貴女が、とても愛しく思えるんです。」

恥ずかしがった覚えなぞ微塵もないのだが、どうやら相変わらず脳内お花畑満載のようだ。

「しかしながら、夜を無事に超えられたようで、さすが聖女と見込んだ方だ。夜中にあちら様もだいぶ頑張ったようですが、突破はならなかったようで」

言われてみれば、扉の前に積んでた家具がいくつか動いている。どうやら力づくで突破しようとした様子であるが、それだけのことをしたのならば、大きな音もしただろうに、そんな記憶はとんとない。

「それはもちろん、ぐっすり休めるように、調整と守護をかせせていただいてましたから」

語尾にハートマークが付きそうな勢いで言われる。もうかえれ、貴様。

「酷いな、こんなに愛しているのに」

ぞぞぞと、背筋に悪寒が走る。外の男どもよりこいつの方が危険な

のじゃないのか、と、身を引けば、輝かんばかりの笑顔で、自称神が微笑む。

「いやだな、この感情は、もともとはあなたのものですよ。あなたが長い人生の間で捨ててきた愛する気持ちと恋する感情のすべてを、私が受け取ったのです。貴方が捨てた物の再利用、つまりエコなんですよ。……まあ、少々受け取りきれずにあふれて、この世界の人々に影響を与えまくってしまってるようですね」と

最後の方はかなり不穏だった気がするのだが、と、眉間にしわを寄せれば、そつと近寄るように、まるでどこぞのジゴロか女衞のような甘ったるい仕草で自称神が指を触れる。即振り払う。きもち悪いというに。

しかしながら、なんということだ。今までの人生ほぼ80年、そのうち70年少しの間、まともに愛だの恋だのと縁がない生活をしてきたのだが、その弊害がこんな形で来るとは。ありえん、と思う気持ちと、自業自得かと思う気持ちのはざままで揺れ動く中、現実逃避するかのように、そついえばなぜこの自称神とやらは、神の癖にやたら人間臭い、しかも変態くさい行動をとるのであるうか、という疑問がぼん、と浮かぶ。もしや、人間観察でもして練習しおったか、それともそついう変態神なのだろうか。

「いえ、いつの間にか習得していたんですよ。」

今更のように言うのもなんだが、人の思考を読んで返事をするのは、楽と言えば楽だが変態以外の何物でもないと思うのだが。それに習得とは、もつとましなものを習得できなかったのだろうか。

頭痛を覚えて額を抑えれば、なだめるように髪をささっと触れて、男の手が離れていく。振り払われると学習したからか、かなり素早

い。やるではないか。睨みあげれば、うっとり見つめ返された。

「つまり、そういう理由で、聖女たる貴方へ皆様愛を注ぐわけです。どうぞ、今まで足りなかった分を受け取りつつ、清らかなまま頑張ってください」

さりげなくハードルを上げられた気がするの、気のせいであろうか。

というか、この世界で聖女として何をすればいいというのか。いまだ説明がないままなのだが、と、思ってみつめれば、にっこりとほ笑んだ自称神が、扉に手のひらを向ける。とたん、積み重なっていた家具が撤去され、扉が開く。

「そろそろ侍女たちが来る時間でしょう。またしばらくしたら伺いますね」

「またんか、この変態」

「引き止めてくださるのはうれしいですが、それはまた次の機会に」  
そついうと自称神こと変態は、再び淡く光の中に消えていった。

さてはて、どうしたものやら。  
なにやらとんでもない状況下におかれているらしいわが身を思いつつ、遠くからもにもよとこちらを読んでいるらしき声を聴きながら、頭を抱えるのだった。

#### 4・心配しないで下さい、貴女に黙って消えたりはしません。

人間というものは、慣れる生き物である。言葉が通じなくとも文化や習慣が異なっていようと、意外となんとかなるものなのだ。現に、日がたつにつれて世話をする娘たちも世話することに慣れたようであり、言葉が通じなくともある程度は融通が利くようになってきた。人間というものは凶太いものである。どんな状況であろうともなじむものなのだ。いやおそらく、自分自身の神経が凶太いだけではないと思いたいところである。

この世界に飛ばされて、ひと月がたった。その間、言葉が通じないなりに娘らに世話をされ、騎士らしきものどもに警護され、王らしきものやその側近らしきものどもと食事をし、神職らしきものに何やら話しかけられるが一切何もわからないのでスルーし、夜は何やら怪しげな様子ではあるけれどもそれらを退け、異世界にいるにも関わらず平和に、さらに言えば聖女といわれながらも何をしたいやらわからぬまま、説明がないのであれば知ったことではないと、太平楽に生活を送っていた。これでいいのか、と言われると多少困るが、しかしながらこちらが好きでここに来たわけでなし、説明させようにもあの怪しげな自称神はあれから姿を現すこともなく、首位の人間とは多少身振りで意思疎通はできるようになったが言語に關しては全く聞き取れないがゆえに覚えることもできず、手っ取り早く体液を交換しようと思ってくる輩どもは、自称神がよこしたのか何やら怪しげな力で撃退しつつ、過ごしてきた。

平和なのはよいことのはずなのだが、そろそろなんとというか、尻のすわりが悪い。働かざる者食うべからずで生きてきたせいもあるであろうが、正直に言ってしまうならば飽きてきた、というのが本音であろう。

そう感じるまでにひと月ほどかかっているあたりどうなのかと思わないこともないではないが、平和であると感じているのは恐らく自分だけ、周囲はどうもそうではないらしい。人とかかわらないで生きてきた、とはいえ、人の感情の機微を感じ取れぬわけではない。それらを無視して生きてきた部分もあるが、感じ取れねば身は守れぬ。この世界へきてひと月、どうやら、この国の上層部らしき男たちの間に、焦りと苛立ちがたまり始めているように見て取れた。

やれやれ、面倒事は嫌いなのだがね。

嫌いだといったところで面倒事の方が避けてくれるわけなぞあるわけもなく、理由が解れば避けようもあるうが、言葉が通じなければ細かなところまではわかることもできず、まあ、おおよそは体液の交換ができていないあたりに要因がありそうなのだが、それがこの身をどうにかしたいという理由だけは思えず、言葉を通じさせたいだけにしては苛立ち具合が強いようであり、とどのつまり全くどうしようもない状態で、なるようになれと過ごしていた。

そして、その時はきた。来るであろうな、とは思っていたが、どのような形であるかはさすがにわからず、想像はしたもののそれだけはなかるうと思っていた手段で、きた。

目覚めて朝食のために呼ばれた席で、騎士に囲まれた。ついでに、なぜか傍付きの娘たちも、騎士に囲まれ剣を向けられている。目の前には王、その側近、神職らしき男たちが、どこか得意げに、満足げな顔をしてこちらをみている。どうやら、この娘たちは人質らしい。私一人であれば取り押さえられぬが、娘たちを抑えればよからうとでもおもったか。深くため息が漏れる。やれやれ、こういう方向もあるうと思っただけだが、まさか本当にこの手段をとってくる

とは、なんともはや、だ。

そんなこちらの様子に、主導権をとれたと思ったか、男たちがジワリと輪を狭める。さて、どうしたものか。娘たちなどしらぬと放置するもたやすいのだが、いい加減わけのわからぬ状況にあるのも飽きてきている。何をなすべきなのかどうしたいのか、そのあたりが解らぬままではどうしようもない。

思案することしばし、やがて男どもの中から王らしき男が、目の前にたつ。なんだその脂下がった顔は。眉間に深く皺が寄る。全く、おそらく美形と言われる顔なのであるが、あいにく西洋人風の顔の区別は全くつかぬ。きらきらしい髪色にきらきらしい目の色であるな、という程度なのだ。目の前で男は脂下がった顔のまま、鼻息荒く何事かを宣言している。だからわからんというに。

周囲が見つめる中、王らしき人は手を伸ばし、こちらを抱き込んでくる。ぞわぞわと嫌悪が背筋を走る。振り払おうと力を込めるが、なぜか振り払えぬ。今までは振り払えていたはずではないか、と、焦るが、その焦りすらどこか楽しむ風情の男は、満足げにこちらの頬を撫でると、何事かをもじょもじょとつぶやいて、顔を寄せてくるではないか

なんとということだ。このままでは危険すぎる、と、とっさに足を振り上げる。

「……………」

衝撃に悶絶し、力が緩んだすきに体を離す。どうやら見事に当たったようだ。狙うは急所、これは基本である。何とかのがれて、周囲が騒然とするうちに距離を取る。しかし、こんな時こそ、あの自称神は姿を現すべきであろうに、ひとつき、姿を現さぬままでもあることから、何事かあったのだろうか、それとも、神はやはり自称にすぎず幽霊であったのではないだろうか。幽霊であるからには、消えてしまった可能性もある。なんともはや、この状態で放置して消

えるとは、とんでもないやつだ。

「心配しないで下さい、貴女に黙って消えたりはしません。」

気が付けば、後ろから包むように抱き込まれていた。振り払おうとして、今の状況に思い当りとりあえず耐える。しかし、心配していた覚えはない。幽霊ならば消えたのではなからうかと考えただけである。むしろキエ口、と、思えば、こちらの顔を覗き込みながら自称神が微笑む。

「相変わらずの天邪鬼ですね。ツンデレ、っていうんですっけ？  
奥が深いですね」

天邪鬼になった覚えもなければ、そんな奇天烈な生き物になった覚えもない。それでも、それでも、助けられたことに一応の感謝を覚えなくもないので、そのまま耐える。

「あなたに求められるまで、と思ったら、本当に思い出してください  
らないんですから。いけずな人ですね」

言われてみれば、このひと月、この時までまともに思い出しもしなかったことに思い当る。思い出す必要もそこまでなかったとおもわれる。

「まあいいでしょう、こうして思い出してくださいだったのでから。  
さて、お仕置き時間ですね」

そついうと自称神の気配が、一気に変わる。殺気、に近いだろうか、けれどももっと澄んでいる。いうなれば、荘厳なる神社の気配がもっと研ぎ澄まされ突き刺さるほどになったような感覚と言えば近いか

もしれない。今までとは違う意味でぞくりと背筋を震わせれば、目の前の騎士たちがばたばたと倒れていく。地面に押しつぶされるように這いつくばる男たちの中、最後までたっているのは王・側近・神職らしき男の3人だった。その3人も青ざめながら、体をがたがたと震わせ、必死の形相である。

「ご存知ですか。この者たちは、あなたの乙女の証を手に入ればこの国が救われると思ひ込んでいたのですよ」

自称神がすつと手を伸ばせた、耐えきれなかったように男たちが崩れ落ちる。それでも膝立ちで耐える男たちに、自称神は低く笑って面白そうに眼を眇めた。

「あなたを愛するあまりと、伝承の間違い、それが相まつてのことでしょうが……愚かですね」

ひとつ突っ込んでもいいだろうか。それは、そもそも、自称神、いや、お前さんが、訂正を入れるかもしれない、何やらあふれたらしき愛なるものを溢れさせなければよかったのではないのだろうか？　そもそも、それがなければ問題なかったのではないのだろうか。溢れるのが仕方がなかったのなら、こうして顕現できるのであれば伝承が間違っている旨を伝えればよかったのではなからうか。なぜ、それをしなかったというのか。

自称神は、男どもに向けていた目をこちらに向けると、それまで鋭かった目をとろりととろけさせ、ゆるりと笑みを浮かべた。

「いやですね、そんなこと。理由ですか？　その方が面白いからです」

……結局諸悪の根源はお前ではないか。

半眼で睨めば、自称神は頬を染め身悶える。なんだそれは、もう決められた行動なのか、と、諦めたように深いため息を漏らせば、自称神の手がするするとこちらの体を撫でさする。その動きの気持ち悪さにさすがに振り払い身を引けば、うっとりとその撫でていた手を見つめる姿があつて、ぞぞぞ、と体が震えた。

「すみません、人類の造形美に思いをはせていたところですよ」

きもち悪い以外に何を言えはいいのかももう分らぬ。

相変わらずのこちらの蔑視の視線に堪えることもなく、自称神は輝かしい笑みをこちらに向け、そして、宣言した。

「さあ、そろそろはつきりさせましょうか。お遊びが過ぎました」

部屋の中には、床に這いつくばる騎士たち、倒れ伏し気を失った娘たち、膝立ちで必死に苦痛に耐える王たちの姿と、その中で優雅に立っている自称神の姿、微かに聞こえるうめき声以外は何もないその部屋に、その声は低く、響き渡ったのだった。

## 5 ・二人は巡り合うために生まれてきた……違いますか？

「そもそも、何故あなたがこの世界に来る必要があったのか。お話はそこからですね」

いつの間に出現したのか、目の前にはテーブルがあり、一つだけあった椅子を引き座るように促される。ちらりと視線を走らせれば周囲は床に伏したり膝をついて苦しげな風情の状態なのだが、それをどうこういつたところで今はどうにもならぬとしか思えないため、素直に椅子に腰を下ろす。うっとりとして見つめてくるこやつは、さらりと人の髪を無断で撫でるとそのまま目の前の男たちに向き直る。

「過去、この国には複数名の聖女と呼ばれる娘たちが降臨しました。そのすべては、私が選び私が好ましいと思った清らかである娘たちでした。この国で聖なる娘として、私と世界をつなぐ架け橋となり、また、世界を愛し世界に愛される、そんな存在であるはずでした」  
とうとうと語られる言葉は、静かに響き渡る。ふと苦しげな風情な男たちをみれば、意味を理解しているのかこやつの声に耳を傾けているようにもみえた。

「はず、であった娘たちは、けれど、誰一人として最後まで聖女として生を全うすることができませんでした」

ぴくり、と、男たちの方が揺れる。はじかれるように顔をあげた神職らしき男の表情が、愕然とした色を浮かべる。そんなはずはない、とでも言いたげな様子で口を開くけれども、負荷は強いらしく、言葉を発することができないようだった。

「愛し愛され、そうであった一部の娘たちは幸いでした。たとえ聖女としての力はなくとも、愛を知ることができ幸せにいきるこ  
とができたのですから。けれど、それは、ほんの、ほんの一部にすぎ  
なかつたのです」

しん、と、室内の空気が冷える。冷気が、漂う。研ぎ澄まされた空  
気は、行き過ぎると人には毒となってしまう。胸の奥が痛むようで、  
大きく息を吸う。まったく、ふざけるでない。話を聞く気はあるが、  
こつちに被害はご免こうむる。行儀が悪いが、足を延ばしてこやつ  
の脛あたりを蹴り飛ばす。

「……っ、愛が痛いです」

そんなもの、どこにもないに決まっとうろくに。

しかしその一撃で、いくらか空気が緩む。気を取り直したように、  
こやつは再び言葉を紡ぎ始める。

「どこで間違つたのか。おそらく、愛し愛された娘たちの多くが、  
王族に嫁したことが原因でしょうか。ある時期、この世界へ来た聖  
女は、いえ、言い直しましょう、聖女候補は、連続して何代も、こ  
の国の王族、主に王となるべきものと愛し合つたのです。それ  
が、不幸の始まりでした。それ以前には、もちろん、聖女として人  
生をひっそりと全うした者たちもいたのです。召喚の際に王城では  
ない場所につまぐ落ちることにできた娘や、王城に落ちてもひっそ  
りと生きて行けた娘も。しかし、その、何代も続いた婚姻は、ひと  
つの間違った認識を人々に植え付けてしまった。つまりは、聖なる  
乙女を妻としたものが王となる。聖なる乙女を妻とすれば国が栄え

る、という、認識を」

「ふむ。しかし、実際に国は栄えたのであろう?」

「ええ。ですがそれは、娘たちの持ち込んだ、異世界の知識によるもの。若い娘の知識ですので拙くはあれども、王宮には優秀な者たちもいます。気づきませんでした。この世界、文化は中世レベルであるのに、水道や下水の設備、入浴設備が整っているということに」

言われてみれば、何気なく日々使っていた生活設備は、元の世界ほどのいいものではなかったが、酷く不快であったり不便であったりするものではなかった。つまり、文化が、知識が持ち込まれていた。それ故に国が栄えたのであり、聖女であったからではないのだ、ということ。

言葉もなく青ざめる周囲の男たちの存在など知らぬげに、こやつは語り続ける。

「本来、聖女の役割は愛を受けること、そしてそれを受け流すこと。聖女を通して流れた愛は世界を巡り、世界を満たす。聖女は愛を受けても受け取ってはならないものなのです。受け取ってしまったら、世界は滞り、災害が増える。災害が増えないように、酷くなる前にとこれはと見込んだ娘たちを聖女候補として送り込んできたのです。が……その、最初の過ちのせいで、すべてが狂い始めたのです。愛し愛された娘たちならば、まだ、よかった。受け取ってしまっただけならば、よかった。けれど、無理に愛を強要された娘たちは、世界を呪い人を呪い、大地を呪った。聖女は、失われていったのです」

「……××、×、×××?!」

掠れ振り絞るような声が、悲鳴のように上がる。神職らしき男が、何やらをいったようだ。それにこやつは強く眉を寄せると、振り払うように手を振る。

あがる悲鳴。そのまま頼れる神職らしき男を、隣にいた王が支える。

「何度も伝えようと思いました。強要してはならぬ、聖女をけがしてはならぬ、と。それを曲解し捻じ曲げてきたのは、あなたたち神に仕えると名乗る者たちの仕業ではないですか。そのくせ、これ以上に何をもとめるといいます」

ふう、と、妙に人間臭く息をついた男は、どこから取り出した椅子へとゆったりと腰を下ろす。

「聖女候補だった娘たちが発した穢れは、大地を世界を　そして、私をむしばみました。おかげで少々、神としてはよろしくない方向に変化を遂げてしまいましたね。実は、今回失敗すると墮天確定なのですよ」

やれやれと告げる男の言葉に、呆れる。なるほどあの変態っぷりはその影響か、しかし酷い影響もあったものだ、としみじみ思っている。自称神が輝かんばかりの笑顔をこちらに向けた。

「いやですよ、変態だなんて。少し特殊なだけで輝かしい個性なんです」

そんな個性認めるつもりは毛頭ない。むしろそれを個性だと言い張るならば個性に頭を下げて謝るがいい。

「まあ、そんなわけで。今回、あなたをこの世界に送り込んだのは、この世界で愛をひたすらに受け取りひたすらに受け流していただけだったからであり、あなたならば多少の強引なあれこれも見事スルーするであろうとの予測の元の行動でありましたし、確かに降臨させる前、させた後に、穢すべからずと強く強く宣託しておいたはずなのですが、これっぽっちも伝わってませんでした。なんというか、もうこのまま墮天したほうが私的には幸せなのではないかと思ったりもするのですが、いかがでしょう」

しらんがな。

にこやかな自称神に対して、周囲の青ざめっぷりは、顔色が土気色になるほどだった。そろそくだわな、神が世界を見捨てるといっているのである。落ち着けるわけもなからう。

「見捨てるのはたやすからうが。さて、どうしたら納得がいくかね」

このままというのも目覚めが悪い。否、放置したところで何ら関係のない世界の連中なのだが、あの世話になった娘たちが不幸になるのは見たくないように思う。基本、人のことなどどうでもいい方なのだが、あの娘たちの働きっぷりや世話は素晴らしいものだったからな、うむ。

「そうですねえ。じゃあ、こうしましょう」

そういうと、するりと自称神、もう認めてやることにするが、神は手を揺らし、あたりにリン、と、重い鈴の音が響き渡る。ぐらりと大気が揺れて、どこか重苦しい、黒い何かが、そこからジワリと広がりに目の前の男たちへ、そして周囲へ、さらには世界へと広がって

いく。

……なんぞこれは、まがまがしい。

「とりあえず、世界にひとつ呪いの枷をかけました。この呪いは、あなたが聖女として全うされない限り、解けません。貴方が穢されたとき、完成します」

神の癖に呪いとは。否、神は祟るといふから、おかしいことではないのか？

「お手軽便利ですよ、黒魔術。」

「ひとつ聞きたいのだが、お前すでに堕ちてないか？」

「いやですね、まだぎりぎりセーフですよ。最後の最後のラインで踏ん張っている感じです。ああ、でも、あなたと一緒に落ちるのもやぶさかではありません」

とろりとける視線を向けたまま、神が告げる。さて、こやつは、今までの聖女候補の垂れ流した呪詛を受けて墮天しかかったところに、新たな聖女候補として転生させた私が、人生をかけて受け流してきた愛の成分を受け取った、と。本来それは、今までの話からすれば浄化にむかはずなのだが、どこかでねじまがってしまったようである。

背筋に悪寒が走る。今まで感じていた、嫌悪や軽蔑ではなく、それは、純粹なる恐怖。

とろり、と、蕩ける表情の神は、静かに言葉を紡ぐ。

「二人は巡り合うために生まれてきた……違いますか？ あなたは私のために存在する。聖なる娘よ、これからも私のために愛を紡いでください。そして、世界に愛を満たしてください」

いつのまにか、重苦しい気配は取り除かれ、周囲にいた男たちは、綺麗に膝をつき頭を下げている。

向けられる視線は期待、懇願、そして 熱望。

「はあ……生まれ変わってこんなことになるとはねえ。どうせ、逃れられんのだろう」

返されるのは輝く笑顔。

「強固な貞操観念と、色恋に惑わされぬ精神年齢、か。なるほど、選ばれた理由も納得できた。仕方あるまい、ただ、この世界で生きればいいのであれば、生きて行ってやろうよ。それしか、せぬがな」

転生してしまったものはいやがない。生きている以上、理由など関係なく生きていく、それが我が信条でもあることだしな。妥協と諦念は、悪いものでもないのだよ。生きていくうえで、これほど素晴らしいものはないと、そう思っている。深くため息を漏らせれば、目の前の神を名乗る男は、低く声を漏らし嬉しそうに笑ったのだ。

こうして、世界は平和を取り戻す。まわりまわる世界は、静かに歪みながらも、平衡を保ち続ける。

世界を支えるのは、一人の聖女。彼女はただ、愛を受け愛を受け流し、今日も異世界の空に生きるのだった。

「……一緒に墮天してしまえば、二人きりになれますよ」

「断るに決まっておろうが」

日々は変わりなく、いびつながらも流れゆくのだった。

f i n

## 1 手をつないだ。きみに一歩近づけた気がした。

今年のクリスマスは雪になるらしい。

本当になるかどうかすらわからないそんなフレーズを、毎年聞いているような気がするのはいのせいだろっか。

天気予報では雪、ホワイトクリスマスだという今年、さてどのよう  
に過ごそうか、と、窓の外を眺める。ホワイトクリスマスをありが  
たがる風潮というのもよくわからない。が、お祭りごとは嫌いでは  
ない。むしろ大好きだ。それを考えれば、雪のクリスマスはなか  
かにいい。学生時代、夏のクリスマスを体験したいという友人に連  
れられ、ふらりと飛び回り南半球まで出向いたのは、懐かしい思い  
出だ。思えばお祭り好きの根っこは、この友人に引きずられるうち  
に作られたような気もしないでもない。

その友人は最近、世界を飛び回っていた生活から、日本に根を下ろ  
したようだ。なんでも誰ぞ同級生と引つ付いたとか引つ付かないと  
か噂は事欠かない男なのだが、先日の同窓会で聞いたような気もす  
る。

久しぶりに参加した同窓会は、どこかよそよそしいようではかしな  
がら、我らが世代にお祭り好きやらとんでもないのがそろっていた  
せいか、割と楽しく参加することができた。「あの」先輩、と、  
冠が付くのは、かの友人のせいであり、自分個人のせいではないと、  
声を大にしたいところだが、さて、どんなものだろうか。

ふむ、と、カレンダーを眺める。

同窓会、といえば。

そうだと、不意に思い出し、携帯を取り出す。しばし考えていくつか打ち込んだ言葉短い言葉を、さっさとメールする。

せっかくだ。彼女に会いに行こう。

先日の同窓会で、久しぶりに会って、懐かしさといろいろな感情で押し寄せのち、アドレス交換することができた、後輩の顔を思い出し、笑みが浮かんだ。

「うっわ、思い出し笑いですか、しゅにーん」

「余計なことというな。ほら、終わったのか修正」

「いて、まだです、すぐやりますって、もー横暴だなー」

目の前で書類の微修正をかけていた部下の言葉に軽く拳骨をくれてやれば、携帯が震える。ぶーぶー文句を言う、それこそ違った意味でお祭り男、ついでに言えばクリスマスに浮かれまくりで相手探して合コン三昧らしい直属の部下の声を無視して、メールの画面に映る彼女の返事に、思わず笑いを漏らしながら、再び仕事に戻るのだ。

「もー、先輩！ 意味不明すぎますよ！」

待ち合わせの場所でのんびりとライトアップされた木を眺めていれば、息を切らせて走ってきたらしき彼女が、そのままの勢いで叫ぶ。

「ああ。……ごめん？」

「って、なんで語尾が疑問形ですか。なんですかそれは、もうもうもうー！ 『飯。19時』って、なんですかあは！ 用事があったらどうするんですか、来なかったらどうするんですかー！ もうー！」

きいいい、と、まるで子ザルのように暴れる彼女は、はたしてもう成人すぎて四捨五入でアラサーよりとはこれっぽっちも思えない。小柄なせいとか、全身でじたばた暴れる様子は、まるで子供のようだ。

「あー、来なかったら？ 家に帰る？」

「そういうもんだいじゃ、なーい！ もー、先輩ってば、先輩ってば、もおおおお」

相変わらず見飽きない生き物だと思ってしみじみ眺めていれば、満足したのか、否、諦めたのか、大きく息をついて、それから、少しばかり身長が高いがゆえに小さ目の彼女からはかなり上の一にあるこちらの顔を、にんまりとした笑顔で見上げながら、首を傾げた。

「まあ、あれですよ。急な呼び出しだったけど、許して差し上げます！ ということで、ご飯、もっちゃんおごりですよー。あーおっなかついたなーっ」

につっこにこと笑いながら、ご飯を連呼する後輩は、もしかせずとも

こちらのことを、便利なお財布とでもおもっているのか。いや、それよりはどちらかというところ、おいしいものを食べさせてくれる存在というところか。まあ、飯で呼び出したのはこちらなので、仕方がないか、と、苦笑いを浮かべつつ、そつと手を差し出してみた。

「……なんですか、この手」

じと、つと、その手を睨み付けつつ、彼女が言う。

「寒いし、君小さいから。迷子なっちゃダメでしょ。だから、手」

「もおおおお！ 子供じゃないんですから！ 子供じゃないんですからあああ！」

きい、と、彼女が牙をむく。威嚇する子猫のようだ。うん、かわいい。まあまあと宥めつつ、その手を取って、そのまま自分のコートのポケットへ。目をむいてぱくぱくと口を開け閉めする彼女は、金魚のようで、これもかわいい。

ああそうだ、自分は、あの同窓会の日から、いや、高校生の時に、彼女のあの涙を見た時から、きつと彼女にべたばれなんだ。

「タルト。好きだろ。おいしいところ、あるから。当然、料理もいけるよ。君向き。二人でおなか一杯コース」

その言葉に目の輝きが変わる。うむ、餌付けは有効か。痩せの大食い在地でいく彼女だ、どこに入るのかと不思議なくらいによく食べる。その食べる様も、本当に幸せそうにおいしそうに食べるので、これがまた悪くない。だからこそ、あの同窓会の後から時折、こうして呼び出しても来てくれるようになったのだが、毎度毎度おいしい

そうに食べる姿をみるのは、たまらなくこちらの癒しでもある。このままじわじわとせめて、クリスマスには自宅で手料理でもふるまうてやるうか。それも悪くないかもしれないな、なんて思いながら、ポケットの中で握りしめた小さな手の温もりを、そっとかみしめる。

伝わる温もりが、どこか、二人の距離を縮めてくれたようで、思わず緩む顔を引き締めるのに必死だった。

まだ、ただの先輩、かもしれないけれど。

おいしいごはんを食べさせてくれる存在、でしかないかもしれないけれど。

まだまだ、これから、これから。逃がすつもりは、もうないから。

クリスマスまで、あと何日？

## 2・怖がるきみの手を握った、僕の下心をきみは知らない。

「しゅにーん、これ、どうぞー」

にゅ、と目の前に差し出された二枚のチケットに、驚きつつも目を上げれば、どこかしんなりした顔の部下がいた。なんだこれは、と目を戻しそれを手に取れば、映画のチケットである。一体これはなんだ？ と視線を向ければ、情けなくまゆを下げて部下は嘆く。

「この前の合コンで良い感じだった子がいたんですけど、デートする予定だったんですけど、振られましたー！ 年収が負けてたそうですー。てなわけで、余っちゃったので、これ、どうぞー」

「ふむ。なぜ、俺？」

不思議に思って問いかければ、しんなり顔が一気にニンマリ顔になる。

「だってしゅにん、最近、良い感じの相手いるっばいじゃないですかーっ。ぜひぜひ、この映画でも一緒に見て、頑張ってくださいっ。クリスマスは目前ですよっ」

ぐっ、と親指を突き出されたので、それを逆向きに曲げてみる。ぎやああと大仰に居たがる部下を横目に、ひらりとチケットを揺らす。まあ、もらえるもんはありがたくもらっておこう。

さて、次会う日が楽しみだ。

そして。

「…………どおおおしてホラーなんですかあああつ！！ 私がホラー苦手って知ってるでしょうっつ」

映画館の前、すでに涙目の彼女が、場所をわきまえてか、いつもより少しだけ小声で憤慨する。

「…………もらいもんだから？」

「いや、そうですけど、そうですけど。もおおお、この映画、見るんですか？」

フルフルと震えながらポスターを指さすのに、首を傾げる。

「やめとく？」

ポスターはSFチックな雰囲気でありながら、間違いなくこれはSFホラー系だということを表すかのように、エイリアンらしき生き物が描かれている。彼女は割りとSF好きだったはずだから、これもいけるかとおもったんだが。だめだろうか、と、見つめていれば、がっくりと頭垂れつつ、彼女がつぶやいた。

「見ます。見ますよ、せつかくですもん。みますとも！ 苦手だけど嫌いじゃないし！ SFだし！ きつと大丈夫、きつと平気、頑張れ私っ、負けるな私っ」

ぐぐつと拳を握りこんでそうつぶやく彼女をみながら、しみじみ思

う。これ、持ち帰っちゃダメかなあ。まだむりかなあ、もうちょっとかなあ。つくづくと可愛い生き物だと思っただけけれど、それは俺だけなのだろうか。俺だけだといひ。

映画館は割りと空いていた。それはそう、クリスマス前のカップルとなると、ムードを盛り上げるために恋愛映画か話題の映画となるだろう。この映画は悪くないが、そこまで話題にはなっていない。……しかしあの部下は、なぜこの映画を選んだのか。もしかしてそのせいで振られたんじゃないのかとか、ふと思ひ至る。まあ、今は彼女を堪能する方が大事だ、と、並んで座った彼女をみれば、すでにふるふる震えていた。……早くないかちょっと。

暗くなり、予告編が始まる。話題の映画が幾つか流れるのを見つつ、次に連れてくるのはもつとベタな恋愛物でもいいかもしれない、と思ひ。あれはれで、面白い。自分とは違ひ感情の流れを見せる男女を眺めるのも悪くない。うむ、と、考えていれば、本編が始まった。なるほど、話題の映画とまではいかないが、なかなかのSF X 技術であり、見てて飽きない。怖がつていた彼女も、引き込まれるように画面をみている。おお、光が反射して目がきらきらして。画面と彼女と、半々で眺めながら、ストーリーが進んだ時、それは起った。

「ひっ」

突然現れたエイリアンに、彼女が悲鳴を上げる。内容としてはB級な展開なのだが、どうやらダメらしい、必死で声を抑えつつ、画面をみている。見なければよさそうなのだが、どうやら目を離すのも怖いらしい。小さく体をこわばらせ縮こまりながらも画面を見つめる彼女に、ふ、と、思ひついて手を伸ばす。

「つつつ！」

手を握れば、かなり驚かせてしまったようで椅子の上で跳ね上がった。……おもしろいなあ、などと、少々ひどい事を考えつつ、こちらを涙目で見る彼女の耳元にそつと唇を寄せて、声を潜めて囁く。

「手。つないでたら、安心でしょ」

その前につなぐ瞬間にびっくりしましたようとか、何やらブツブツいっていたようだが、再び画面が緊張感あふれるシーンになると、握る手にぎゅつと力がこもる。プルプルふるえるさまが可愛らしい。さつき向けられた涙目もたまらない。このチケットをくれた部下の顔を思い出し、いい仕事をしたと内心で褒めてやる。なるほど、これを狙っていたか。あざといと言うか、通常であればいまいちな手だが、今回はよくやったとしかいいようがない。

つながる手が、温かい。ふるえる彼女が、愛おしい。ここが映画館でなければ、後ろから抱きしめながら見るのも悪くはない。そしてそのまま　いやいや、落ち着け俺。美味しくいただくのは、もう少し先だ。ふるふると震え、時折ぴきや、とばかりに飛び上がる彼女と、どこかコメディの要素すら見せ始めた映画を眺めながら、そつと下心を押し隠した。今はまだ、早い、と。

「あー……怖かったあ……」

映画館を出て、しみじみという彼女に首を傾げる。いや、確かにホラー要素はあったが、SF要素とコメディ要素のほうが強かった気がしないでもない。

「そっ?」

首を傾げれば、強くうなづかれる。

「そうです! 私、ほんつとダメなんですよ。リアルに想像しちゃうから。あー、今夜寝れるかなあ私」

しよんぼりとうなだれる彼女と、実はまだ手をつないだまま。映画館を出るときに、手を引いてそのまま。彼女は、気づいてないのか気にしていないのか、その手をぶんぶんと振った。

「ね、先輩、ご飯いきましょ、ご飯。今日はラーメンな気分です!」

先ほどまでのしよんぼりはどこに行ったのか、という風情で笑いかける彼女に、ほほ笑み返す。

「ん。しお?」

「今日はぱりつと豚骨で! 唐そばいきましょ、唐そば!」

かなりがつつり豚骨気分らしく、濃厚な店をあげる彼女に頷いて、連れ立って歩き出す。

さて、次はどんな手でいこうか。

カウンタダウンは、もう始まっている。

### 3・放課後の教室は少し寒くて、きみの手はこんなにも温かい。

手をつなぐ。最近は何りとスムーズに出来るようになったこの行為だけれど、果たして再開前、一番最初にこの手に触れたのはいつだったか、と、記憶をたどる。ぼんやりと浮かぶ情景は、放課後の図書室、茜色に照らされた、冬服の自分たちの姿。ああ、あれはいつだったか。たしかあれば、高校2年か、3年か。おそらく3年の、冬を目の前にした頃のことだった。

なんとなくつるむようになった友人と、なんとなく図書室に入り浸るようになって、なんとなくつるむメンバーが決まっていった。全員が委員会やら固定した何かに所属していたわけではないけれど、そこらの文化部の幽霊部員たちよりは密な付き合いをしていたと自負する、あの頃。その日も、図書室のメンバーは相変わらずで、じやまにならない端に居場所を定め、皆勝手に本を読んでいた、ゲームを持ち込んで遊んでいた、何やらだべっていたり書いていたり、さまざまだった。

「そっぴや、今度はどこいったんだ」

そっぴや久しぶりに顔をみた、聞けば先日来学校を休んでいたらしき友人に問いかければ、こちらを見ながら彼はメガネを上げた。

「ん、南のほう。寒くなるからと思ったけどまだ早かった」

果たしてその南が、どのあたりやら。よくのせられて、学校登校途中に思い立った友人に誘われるまま、海を見にいくなんで真似をしていたが、さすがに3年になると皆自重を始める。内申点つてやつ

が、多少なりとも気になるお年ごろだからだ。けれど、彼はそれをこれっぽっちも気にしない。そんな自由さに、次第に周囲もなれたが、教師はそうもいかないらしく、色々と彼は目を付けられている様子でもあり、しかしながらその豪胆さから一部の教師には気に入られているという、なんとも不思議な存在だった。そいつの友人筆頭格ということで、色々ともちらも言われるが、まあ、必要最小限受け止めてあとは受け流す方向で、平和になんとかやっていた。

「南かあ、これから寒くなりますしねえ」

窓の外の紅葉を見つめながら、本を読みふけているとばかり思っていた後輩の一人が呟く。その声に、友人がわずかに口元をほころばせるのはいつものこと。さて、こいつらはお互いにわかっているんだろうかと、しみじみ眺めると、きゃっきやと数名で雑誌を覗き込んでいた、このグループの中では割りと普通に属する系統の子たちのうちの一人である彼女が、会話を耳にしてかこちらに駆け寄ってきた。なんとというか、子犬のような子だな、と眺めていれば、駆け寄ったままの勢いで、こちらに詰め寄ってくる。

「先輩先輩っ、もうすぐクリスマスですよ！ どっかいいところ知りませんか!？」

こちらに詰め寄ってきているのだが、その質問は自分よりも友人に向けたほうがいいのではないだろうか。首をかしげ視線を友人に向ければ、薄く苦笑いするのがみえた。

つられるように友人に視線を向けた彼女に、友人はひとつうなづくと、窓へと視線を向ける。

「あそこ。あの山、クリスマス近くなると、綺麗にライトアップさ

れるでしょ。山がクリスマスツリーみたいに。クリスマスのは、山の頂上付近をライトアップして、かなり良い感じになるらしいよ。標高も地上よりは高いから、ホワイトクリスマスになる可能性もあるし。まあ、かなり寒いけどね」

なるほど、近くにあるあの山は、この近辺の学生であれば一度以上は登山などの行事でいったことはあるだろうが、そういうイベントでいったことはない。

「山ですかー。夜ですよねえ。うう、厳しいなあ。でも行きたいなあ」

うーうー、と唸るように呟く彼女に、口をついて出そうになったのは、一緒に行く？ という言葉。だけど、高校生の身分で夜中の外出はまだ厳しく、そもそもクリスマスに誘いをかけるほど親しくはなくて。その言葉を飲み込めば、彼女が諦めたようにつぶやいた。

「うー、オトナになるまで我慢しますー。いつか、大人になって彼氏に連れてってもらおうんだ！」

ぐっと拳を握る彼女を、無意識に見つめていれば、はっと何かに気づいたように顔をあげる。内心びくりと驚いていれば、まゆがそのままへちよりと下がる。

「あー、宿題教室に忘れたことに今、この瞬間！ 気づいてしまいましたー。私はこれより、教室に寄ります。それで時間も時間なので、このまま退散しますですー」

へちよりまゆの横に敬礼のポーズをとり、ではっと頭を下げた友人のもとに向かう彼女を、ぼんやりと見送る。

何事か友人に声をかけ、カバンを手に図書室を出ていく彼女を見ていると、脇を肘でつつかれた。

見れば、我が友がこちらを見ている。

「何」

「いけよ。何も無いとは思うが、何も無いとはいえないだろ」

確かに、すでに生徒の数も少ない教室棟だ。ふむ、一理ある、と、頷いて、カバンを手に図書室を出る。

さよならー、とかけられる声にお先に、と返し、友には一度手を振って、教室棟へと急いで向かう。確か彼女は一つ下、ならばと当たりをつけて急ぎ足で向かえば、ラッキーなことに一つ目の教室で彼女を発見することができた。

がらりと開いた扉の音にびくうう！ と、リアルに飛び跳ねたように見えた彼女は、こちらをみて、ほっとしたように息をついた。

「なんだあ、先輩ですか。びっくりしましたよーもう。っていうか、どうしたんですか？」

きよとん、とこちらを見るのに、ゆっくりと歩み寄れば、不思議そうに首を傾げる。何かざわざわする感情を感じながら、しかしそれをおくびにもでないように押さえ込んだ。

「一応、護衛？」

「なぜ疑問形ですかーっ。ていうかもう、先輩たちって不思議さん

すぎる……」

ふるふると首を振り、机から取り出したらしきノートをカバンに収めた彼女は、ふう、と息をつく、こちらを見て笑った。

「でも、ありがとうございますー。もう、あれですよ、図書館メンバーの先輩方、地味に紳士過ぎて、惚れそうですよっ」

惚れてくれればいいのに、と、思ったのは秘密の話。けれど、誤魔化すように手を差し出せば、再びきよとんとこちらを見る彼女。

「帰るよ。手」

「は？ え？」

突然のことに呆然としている彼女の手を、割り強引に取れば、わたたとカバンを手に椅子を戻しはじめ。それを見やってから、手を引いて歩き出す。

「あ、あの？ 先輩？」

手とこちらを両方交互に見つめながら、けれど手を振り払うことなく戸惑いつつも後をついてくる彼女に、じわりと自分の耳が赤くなっているのがわかる。何をしてるのか、と、自分でも思いつつ、しかしながら手から伝わる熱が暖かくて、離したくなくて、黙ったまま歩く。しばらくして人の声が聞こえるまで、無言のまま、彼女の手を引いて歩いた、そんな遠き日の思い出。

そうか、あの時から、自分はもう彼女に惹かれていたのかもしれない。ふと、隣に並んで歩いている彼女を見下ろせば、不思議そうにこちらを見上げてくる。

「なんですカー、先輩っ？」

あの頃は、制服姿で、長い髪を二つ結びにしていた。今は、肩までの長さの髪をゆるく流し、社会人らしい服装でこちらを見上げていく。本気で落ちたのはそのあと、かもしれないけれど。間違いなく自分は、最初から彼女が気になっていたらしい。

誤魔化すように視線をずらし、遠くに見えるライトアップされた山をみあげる。あの山は、毎年こうしてライトアップされる。そして、クリスマスの日も。

「クリスマス。山、いこうか」

「え、山ですか！ クリスマスっていえば、ライトアップされてきれいなんでしたっけ？ うっわ、行きたいです、ぜひ行きましょー」

楽しそうに答えて、つないだままの手をブンブンと振る彼女が、あまりにも可愛くて。

「ねえ」

そっと呼びかける。

「はい……っ?」

不思議そうに首をかしげて見上げてきた彼女に、少しだけ屈んで、唇に小さなキスをひとつ。

「ごちそうさま」

「……っ?! っ! っっ!!?」

声にならない声を上げ、ぱくぱくと唇を開け閉めする彼女に、そう告げる。真っ赤になった顔も、うるたえた顔も、たまらなく可愛くて愛しくて。気がつけば、満面の笑みでほほ笑んでいた。

「せんぱいいいいい……」

情けない声を上げる彼女の頭を、つないだ手とは逆の手でぽんぽんとたたけば、ますますまゆがへちよりと下がる。ああ、もう、お持ち帰りしたくてしかたがないんだけど。味見で我慢した自分を、褒めて欲しい。

「ご飯。和? 洋?」

さり気なく問えば、むうつうつ、と一度きつくまゆを寄せてから、深い溜息一つ漏らして、彼女がびし、っと人差し指を立てた。

「和で! っていうか、あそこ、炉端焼きの店! あそこで山芋鉄板と、魚のいいやつ焼いたのと、最後は雑炊でしめるんですっ! 日本酒も、いいの飲んじゃいますからねっ!!」

その指でこちらをささないところがしつげがいいというべきか。

「了解」

一つ頷いて、彼女の手を引いて、ゆっくりと夜の街を歩いてゆく。

願わくば、ずっとこのままでありますように。

そう、静かに願いながら。

あと少し、あと少し。

クリスマスは、もう目の前。

#### 4・ひとりにしてと微笑うきみの、震える手を離すものかと。

クリスマススイブである。勝負の日である。寸前まで浮かれていた部下は、結局お相手にドタキャンされたとかで、なにやらどんよりとこちらを見ているようだが、とりあえず無視だ。こちらは今日、勝負をかけるのだ。少々お約束すぎて妙に照れる気がするのは、なぜなのだろうか。過去をさかのぼって、ここまで真面目にクリスマスというものに向き合ったことがあっただろうか。いや、ない。お祭りごとは好きだ、だから騒ぎ倒すことはあったが、クリスマスという存在にかけたことはないように思う。

だから、余計照れくさいのかもしれない。

窓の外を見れば、薄曇り。ホワイトクリスマスになるのか、それとも、星空のクリスマススイブになるのか。どちらにしても、楽しみだと、薄く笑った。

あれから。

こまめに食事に誘い、こまめに手を握った。……こう表現すると、何やら自分が変態くさい存在になったような気分になるが、まあ、それだけこまめにアプローチしたことだろう。それに対してのレスポンスは、多少彼女の挙動が不審になったり、顔を赤らめてくれることがまれにあったり、といったところである。まあ、手をつなぐことに慣れすぎてそれでは顔を赤らめてくれなくなったのは、いいことなのかわるいことなのか。いや、手をつなぐ事すらできなかつたらそれ以上にはすすめないのだからとそこまで考えたところで、仕事中であることに思い至り、とりあえず思考を停止する。

「しゅにーん、顔がやにさがってましたよ。えっちー」

余計なお世話である。手に持っていた書類で部下の頭をひとつたたいて、ぶーぶー文句をいう部下をそのままに、仕事に集中した。

決戦は、仕事終わりからである。

「おっまたせしましたーっ。せんぱいっ」

息を切らせ、マフラーを巻いた彼女が、白い息を吐きながら駆け寄ってくる。微妙に色合いがクリスマスの配色のような今日の格好に、少し驚いてしみじみ眺めれば、むふふ、と彼女は笑ってそこで一度回る。

「どーですか、クリスマスバージョンな私っ」

「うん。かわいい」

「ちよ、ま、せんぱい、それはストレートすぎる」

ひゃあ、と手袋をした手を頬にあてる彼女の顔が、赤く染まる。うん、かわいい。きつと今、人には見られないほどだらしな顔になっているに違いない。でもいいんだ。かわいいんだから。そう内心で呟きながら、手を差し出す。

「いじじいっ」

ひとつ頷いて、素直に手を取る彼女に、湧き上がる嬉しさはどう表現したらいいんだろうか。もうすぐ、もう少し。きつと彼女を手に入れる、と、心に誓いながら、ゆっくりと山へと向かった。

山へは電車とバスで行く。もちろん、車でもいいのだが、この日に車をだすなど野暮すぎる。どこぞに連れ込むのであれば別だろうが、帰りはタクシーで我が家直行、これで決定なのである。彼女の了承は今のところないが、それはそれとして。山のふもとへのバスは、カップルだけではなく親子連れもいた。キャツキャとはしゃいでは親にいさめられている様子を見て、彼女が小さく笑った。その目が優しく、やわらかくて。ふと、遠いあの日、完全に彼女に落ちた時のことを、思い出した。

「……………ひとりに、してください」

夕暮れの教室で、震えながら、涙を零すまいと唇をかみしめ、それでも、こわばった笑顔を浮かべた彼女の姿。遠くから聞こえる部活の声と、少し肌寒い教室の気温と。打ち捨てられた小さなノート。ささいな、ささいな食い違いが友達同士で起こったとき、彼女はあいだにはさまれた。そして、その両方を何とかしようとして、奮闘したにもかかわらず、今度は両方から彼女が攻撃された。些細な食い違いと、些細な擦れ違い。言ってしまうえばそれだけのことなのだけれど、それでも彼女は笑って、両方をつなげた。つながりとした。

彼女は、笑顔だった。いつも、いつも笑顔だった。けれど。

無言のまま彼女に歩み寄り、思わず抱きしめかけてとどまる。そし

て、彼女の手を、握る。びっくりと震える彼女が逃れようと手を引くのを、少しばかりの強引さで留めて、ただ、握りしめる。

「君は、悪くない。君は、頑張った」

こんな時、上手い言葉の出てこない自分が、悔しい。ただ、それだけしか言葉にならなくて、それだけを繰り返していれば、彼女がしゃくりあげ、やがてぼろぼろと頬を涙が伝いおちる。次から次に、頬を伝い流れる涙を見つめて、その涙を拭うことができればと願いながら、けれど、ただじつと手を握り続けた。

遠い遠い、昔の記憶。

バスから降りれば、すでに山のふもとで。間近で見上げる山は、美しくライトアップされていた。

ここからはケーブルと、スロープカーでのぼることになる。歩くのも悪くはないが、今日は無しだ。手を取り特別に夜間運行されているそれに、乗り込んだ。

よくある100万ドルの夜景、と、名づけられた風景が、眼下に広がる。工場地帯のこのエリアが、自分と彼女が生まれ育った町。少しばかり古臭くて、少しばかり暖かい。そんな街を眺めながら、同じように下を見つめる彼女に視線を移す。ともにある存在。ともにあってほしい存在。一度離れたけれど、あの同窓会で会った時から、

狙い定めて今日まで来た。

逃がしてあげるつもりはない。涙を一人で流すことなどないように、ただ、守りたい。

無言のまま風景を眺め、スロープカーに乗り換える。ゆっくりと登るうちに、頂上のライトアップが次第に近くなっていく。きらきら、きらきらと光がふりまかれ、それが彼女の顔に反射する。

たどり着いた頂上で、皆が下りていくの後ろ、最後から、ゆっくりと展望台方面へと進む。きゃあきゃあとはしゃぎながら眺める人々、寒さに寄り添って眺める人々の群れをみながら、彼女の手を引いて、ゆっくりと、進む。

「……ねえ」

「なんですか、せんぱい」

きよとん、と、見上げる彼女に、ほほ笑みかける。

「好きなんだけど。付き合って」

「っ！　っっ！！　せ、せ、せんぱいつ？」

一気に真っ赤になった彼女を、眺めながら、ゆっくりと夜景が見渡せる場所へと向かう。あうあうと言葉にならない言葉を漏らす彼女の背に手をあてて、ほら、と、促せば、一気に彼女の表情が変わった。

「う、わあ。ライトアップって頂上だけじゃないんだ」

山のいたるところに、きらきらと光がちりばめられている。眼下の夜景と相まって、幻想的な風景となったそれは、山の上の寒い空気の中で、この上なく、きらきらと、きらきらと輝いてみえた。

無言のまま、二人で、その風景を見つめる。人の声、笑い声、楽しいげな叫び、そして、感嘆の声。さまざまな人の声を聴きながら、二人、ただ無言で、その風景を見つめ続ける。

ふと、彼女が、見上げるように視線をこちらに向ける。  
なに？ と首を傾げれば、ふ、と、彼女が柔らかな蕩けるような笑顔を見せた。

「仕方がないから、付き合ってあげますよっ、せんぱいっ」

言葉とは裏腹に、彼女の顔は真っ赤で。目は潤んでいて。ああ、かわいいなあ、と、衝動のまま、背後から抱きしめる。

ぎゃ、と、声をあげるのに小さく笑いながら、そっと耳元で、囁いた。

「メリークリスマス」

ずっと笑っていて。どうかもう、一人で泣かないで。そう、願いながら、やっと抱きしめることのできたことが、幸せだった。

「メリークリスマス、です」

やっと、この手の中に、彼女をつかんだ夜のお話。

## 5・僕はただきみの手を握って、きみは黙ったまま頷いて。

クリスマスの朝である。

あのあと、彼女を連れて自宅へ帰り、準備してあった料理やケーキを出して二人で夜を過ごし、ついでに彼女を美味しくいただいた。そして、今、目覚めた腕の中に彼女がいるわけで。そのぬくもりに気づいて、ゆるりと頬が緩む。あえて遮光ではないものを選んだカーテンから差し込む朝日に気づいて目覚めたのがつい先程、それから、腕の中の温もりに気づいて顔を緩めるまでどれほどの時間もなかっただろう。幸いなことに今日は日曜日、どれほど寝坊しようと仕事に差し支えない。

腕の中、すぴすぴと心地よさげに寝息を立てる彼女の寝顔を、じっと見つめる。どちらかと言えば全体的に小作りな彼女の顔は、見ていてなぜか飽きない。惚れた欲目というやつだろうか。それならそれで結構、と、しみじみと見つめながら、そういえば、と、サイドテーブルの引き出しへと手を伸ばし、その中にひそませていたものを取り出す。

「……ん」

動く気配を感じたのか、彼女が身じろぎ、小さく声を漏らす。起きるのかな、と、見ていれば、むう、と一度強く眉を寄せた後、ゆっくりと瞼が開いた。そして、そのままとろりとほほ笑む。

「おはよびいぢやいま……すう！？」

その笑顔のまま寝ぼけたような声であいさつを始めたが、最後に跳ね起きた。目がまんまるだ。きよるきよると周囲を見回し、自分の格好を見やり、こちらをみやり、ぱくぱくと口を開け閉めし、言葉が出ないのか、両手をばたばたと動かして何かを伝えようとしている。

ああ、かわいいなあ。などとずれた感想を浮かべつつ、にっこりとほほ笑み返す。

「ごちそうさまでした」

「っ、なんかちつがーうー!!」

その後バタバタと一人暴れる彼女をなだめ、どうどうと落ち着かせてみれば、どうやら羞恥のあまりの行動のようだった。まさか記憶がないのか、と思ったがそうではなくて、ほっとした。いろんな意味で。

はふう、と、やっと落ち着いて肩を落とす彼女を見つつ、さて、と先ほど引き出しから取り出したものを手の中でもてあそぶ。わかっている、タイミング的に今というのは微妙だということも。だが。

「ねえ。これ」

「え、なんです、か？」

不思議そうにふりむいた彼女に、そつと箱を差し出す。小さな小箱。目を見開き硬直する彼女の手にそれを握らせ、開いて見せる。

小ぶりの透明の宝石のついた、指輪。あえて大きなものにしなかったのは、彼女のイメージからだろうか。もっといい値段のものでもよかったのだけれど、一目ぼれして選んだ、今日のための、指輪だ。男一人、宝石店に出向くのは恥ずかしくもあつたが、しかし、是非にでも用意したくて、気合で乗り切った。気持ちは重かるうがしたことではない。ただ、半端な気持ちじゃないんだと、伝えたかったから。もし、気に入らなければ、一緒にまた買いに行けばいい。だからこれは、気持ちの問題なんだ。

「え、せんぱ……」

「傍にいて、欲しいから」

声が出ない様子の彼女に、箱から指輪を取り出し、その薬指にはめる。抵抗しない彼女に、受け入れられているらしいと少し安心する。呆然とその所作を見つめていた彼女の顔が、だんだんと赤く染まっ  
ていき、その目に涙がたまる。

じっと見つめていれば、視線が絡む。そっと手を握り締める。小さな手。これから守っていく手。守らせてほしい手。

じっと見つめれば、彼女は、やがてひとつほろりと涙を零して、静かに頷いた。

クリスマスの、朝のことだった。

そして、今、彼女は怒っている。否、拗ねているというか、とにかく

く、ダイニングテーブルの椅子に腰かけて、両手にマグをかかえこんで、頬を膨らませている。うむ、そういう仕草も小動物っぽいのだが、と、声に出せば再び怒らせそうなことを考えつつ、手早く朝食を整える。

あの後、空腹を知らせるお腹の音で彼女は我に返り、自分の置かれた現状に気が付いたらしい。つまり、それなりに綺麗にはしておいたけれど、というやつである。きゃあああと悲鳴をあげると、ばたばたとシーツを再びひつつかみミノムシのように丸まり、うとうう、なんてこと！ と一人呟くのに、シャワーをすすめる。こちらもシャワーを浴びたいところだが、とりあえず、と朝食の用意をはじめ、彼女が驚くほどのスピードで上がってきた後、交代でざっとシャワーを浴びて戻れば、身支度を整えた彼女が、頬を膨らませてダイニングにいたわけで。

とりあえずご機嫌を取るために、ミルクたっぷりのカフェオレを渡せば、一瞬頬が緩んだものの再びぷっくりと膨れ上がる。やれやれご機嫌斜めのようだ、と、まずは彼女のおなかをなだめるために、朝食を作る。ふわりと漂ういい香りにちらり、ちらりと彼女がこちらを見るのがわかり、笑いが漏れそうになるがここで笑うと余計にご機嫌を損ねてしまうだろうから我慢である。

やがて出来上がった料理を彼女の前に出せば、その目が輝く。

「いったただつきますっ！」

先ほどの不機嫌はどこへやら、ご機嫌な様子で食べ始めるのに満足感を覚えながら自分も食事をとり始めれば、じつとこちらを見る彼女の視線。首を傾げれば、むう、と、眉を寄せる彼女の姿。

「どうした？」

「料理は上手いし、稼ぎはいいし、なんかくやしーんですけど！いいですか、私だって料理できないわけじゃないんですからっ。これからきつと頑張ってみせますからっ」

びしっ、と手に持ったフォークを天井に向けつつそう宣言する彼女に、正直に言おう、脂下がった顔になってしまったことは否定しない。

「期待してる。 奥さん」

一瞬にしてぼふんと、まるでマンガのように赤くなった彼女は、もうもうもうー！！と、悔しそうに照れながらべしべしと、机の隅をたたく。あの状況でプロポーズなんて、とか、もう、とか、料理上手とかずるいー、とか、なにやらもぞもぞとつぶやいているから、一度首を傾げ、そして、立ち上がると彼女のそばへ向かう。

「ねえ」

声をかければ、はう、と、一度跳ね上がりこちらを見上げる彼女。その際に、小さなキスをひとつ。

「っせ、せんぱ……っ」

「ご飯醒めちゃうから。あ、あと、愛してるよ」

「っいでのように言わないでええええ」

あうあうあうー、と、へちよりとまゆを下げて嘆く彼女の頬をさらりとなで、席に戻れば、もうもうもうー！ といいながらも、溢れ

るように笑って彼女も食事を再開する。

ずっとずっと、こうして笑っていらればいい。彼女と、そして、  
いずれ生まれくるかもしれない子供と、楽しく笑ってられるひと  
時を持てれば、いい。

簡単なようで大それた思いを静かに胸に抱えて、言葉を交わしながら  
クリスマス朝ご飯を終えたのだった。

クリスマスイブに捕まえた彼女は、クリスマスに、妻となる人とな  
った。

そんな、幸せな、クリスマスのお話。

f i n .

## 1・林檎の毒に浮かされて

「ごきげんよう。これから、どうぞよろしくお願いいたします」

そういつて一国の王女らしく、優雅な淑女の礼を見せる乙女を、彼は内心苦々しく、しかしながら、外側は穏やかな笑顔を浮かべながら、静かに眺めた。

「ようこそ、我が国へ。行き届かぬところがあるやもしれぬが、心安く過ごされるよう」

豪華な謁見の間、王とその傍らに立つ王太子たる彼と、その周囲にはこの場に来ることの許された王の正妃と数多側妃の上位一部、それらに囲まれながらも、乙女はうるたえる様子もなく、嫣然と微笑んでこの場にあった。

「ありがとうございます」

その言葉を最後に、謁見は終わりをづけ、彼はゆっくりと姫に歩み寄る。向けられる数多の女の視線の、そこに含まれる毒が、どれほどのものなのか。皆が皆、自らの求めるもののために、ただ、彼を邪魔に思っていることなど、王とこの姫以外、皆が知っている。そのような場所に、知らぬとはいえ嫁がされるこの姫の、なんと不幸なことか。幸い視線に気づかぬのか、穏やかに微笑んでいるように思えるけれども、これから彼女の身も危うくなりかねない。深く深く漏れかけるため息を必死で抑え込んで、彼は姫へと笑いかける。

「ようこそ、姫」

差し出した手に重ねられた手は、小さく、そして、細かった。

……やっぱりあの時、気合で出ていくべきだっただろうかと、彼はひっそりと心の中で嘆くのだった。

脱走しようとして、飛び出したはいいが、すぐにつかまり、息を切らせながら駆けつけてきた老臣たちに身も背もなく泣きながらすりつかれて、諦めたのは、記憶に新しい。

この国は、とうに腐っている。いや、何とか老臣たちが老害だのなんだのと陰口をたたかれながらも踏ん張っているからこそ、持っているのではないだろうか。物心つく前から気が付けば老人たちに仕込まれ、10の歳には執務を取っていた。今思えば、父が頼りないからこそその決断であり、国のためには仕方がなかったと、わかる。

弟やら妹やらがわらわらいる中で、亡くなった正妃の息子であり一番最初の男子だったが故の皇太子就任であるためか、また、母を忘れられぬらしき父が正妃をめとらぬゆえか、わらわらいる側妃たちが我こそはと色めき立ち、さらにその息子たちが、あとにわらわらと控えている。皆が皆愚かであるわけではないけれども、その母は文字通り、子供たちが大事で愛しいらしく、手を変え品を変え、こちらの命を飽きもせず狙い、さらにそれを王は気づきもせず進言しても妃たちを愛しているのかなんなのか、かばうばかりで改善もなし、そんな毎日の中逃げ出したくなったところで何ら罪などないだろう。結局は逃げられなかったが。

そして今回、大国とは言えぬが、かなり由緒のある隣国より、かの国の王族の寵愛深き姫君が、王太子たる彼のもとへと嫁ぐこととなった。これは、彼の立場をさらに強めることになるであろうし、王

太子たる地位を盤石とするものでもあり、後宮の女たちがざわめいているのは、すでにこちらの知るところでもあった。

かの国も、それほど寵愛している姫君であれば、何も我が国に嫁がせることなどないだろうと思わず愚痴をいいたくなる彼ではあるが、あちらの国からの申し出であり、それを断るだけのものは現在のこの国にはない。突っぱねる意味もなければそのメリットもないが故に、多くの貴族どもは反対もできず、逆に老臣どもはこれを機会により王太子の地位を盤石にさせたいと狙ったようである。しかし、この現状、いつわが身が狙われるかもわからず、ついでに言えば、姫の命すらも狂った女どもにかかればどうなるやもわからない。どこまで守れるか、と、こぼれそうになる吐息をこらえながら、彼女と共に謁見の間を下がる。

左右に目を走らせれば、自らの子飼いと老臣どもの手のものが、上手く配備されており、背後にはどこからかわれた我が側近が、さらにその隣には姫の侍女らしき女が控えていた。現状は大丈夫だろうかと、思っていれば、目の端に見たことのない影がよぎり、思わず姫の手を引く。さつそくかと、構えれば、その影は何か光るものを手にこちらに駆け寄ってくる。

「…………ちっ」

らしくなく低い舌打ちを漏らせば、周囲の人間があわただしく動く。  
と。

「…………はあ？」

その男が消えた。否、横から現れた陰に浚われるようにぶつかられ

て、繁みの奥へと姿が見えなくなった。繁みの向こうからはくぐもつたうめき声が聞こえ、やがてそのまま、静かになる。ちらりと視線を向ければ心得た護衛が様子を見に向かう。

「わが君、大丈夫ですわよ」

ふと、聞こえた声にそちらをみれば、彼を静かに見上げる姫の顔があった。その顔にはどこか楽しげな、悪戯めいた表情が浮かんでいて、場にそぐわぬそれに、彼は戸惑う。

「ひ、め？」

やがて戻ってきた護衛の傍ら、いつかどこかでみた暗殺者が、これまた黒づくめの暗殺者のような男を引きずってやってきた。

「……お前は」

「ご無沙汰しておりますよ、王太子さん。こいつ、第5側妃んとこの子飼いですよ。あそこはどうにも、財布が乏しいらしく腕が悪いのしかやとえんですからね」

いやそういうことではなく。どういうことだ、と訝しく睨み付ければ、男は大仰に肩をすくめてみせた。

「雇う金が高くて、肩入れしたい方に鞍替えするのが俺の主義でしてね。とりあえず、とある方と利害が一致したもんで、とりあえずは王太子さん派っつーことで」

男は引きずっていた男を護衛に渡すと、では、と軽い言葉を残して去って行った。

「……どうなっている」

低く側近に声をかければ、一度頭を下げて周囲の人間に耳打ちし、指示を出しているようだった。わからないまま、そういえば、と、姫を見ると、こちらをどこか楽しそうに見つめる姿があつて。

何やら、嫌な予感が、した。

「お待たせして申し訳ない。すぐに部屋にご案内しよう」

振り払うように一度首を振り、再び姫の手を引き歩みだす。

「おきになさらず。皆様、大事な林檎を守るのに必死なのでしょう。

そこに毒が含まれてることなど気づくことないのでしょね」

くすくす、と、小さくこぼれる声と、言葉と。

どうやら、わが妃となる姫は、一筋縄ではいかないらしい、と、内心で再びため息をつく彼だった。

……やっぱり家出しとけばよかった。

## 2・硝子に映える澄んだ白

案内された部屋は、やたらと豪華な部屋だった。無駄に派手派手しい様子は、わが国では見られぬもの、こちらの国はどうやら、このような装飾が好まれるらしい。

否。

情報は確かのようなね、と、姫は内心でひっそりと笑う。その笑顔を見咎めてかこちらをみる一人の青年、この国の王太子にしてわが夫となる人物に、何気ないそぶりで笑顔を返した。

また後程に、と挨拶を交わし、静かに退室していったこの国のものたちの姿を見送ると同時に、この部屋付きだと紹介された数名の侍女たちには仕事を言いつけて下からせる。応接の間の隣、完全な私室となる部屋で、国からついてきた侍女と二人になった姫は、うっそりとほほ笑んだ。

「この国で、正解だったようだわ」

しかし、姫の忠実なしもべたる侍女は、その眉を顰めて、首を振る。

「どこがです。あのような公式な場だというのに、妙に派手派手しくまるで夜会のような、それもどこか品のないほどのドレスをまとったような妃たちがいる国ですよ。どれほど後宮が腐っていることか。つけられた侍女たちだってどこまで信頼できるものか」

先ほど下がっていった侍女たちの、こちらを品定めするような表情を思い浮かべ、再び首を振って見せれば、姫たる娘はくすくすとど

こまでも楽しげに笑い声を零した。

「馬鹿ね。リスクが大きければ大きいほど、戻りは大きいものなのよ」

ニヤリ、と、微笑んだその顔は、悪戯めいた表情でありながら、どこまでも艶やかだった。

この国に嫁ぐ、と決めたのは、姫本人だった。当初、周囲からは寵愛深い故の反対のほかに、その裏を知ることからの反対も、激しいものだった。

浪費の激しい妃とそれを許す王の国。

唯一国の手綱を握る王太子も、命を狙われる国。

それらの言葉を、姫を愛する国の人々は、直接耳に入れるのははばかりながらも、手を変え品を変え、かの国はやめておけと言葉は違えど皆同じことを告げてきた。けれど、姫は首を振る。かの国へ嫁ぎたい、かの王太子の妃になりたいのです、と、かたくななまでにそう繰り返す姫は、訝しがる周囲に、涙ながらにこう告げたのだ。

かの王太子をお見かけした際、一目で恋に落ちました。

かの方以外に嫁ぐことなど、考えられませぬ。

どうか、どうかわたしをかの国へ嫁がせてくださいませ。

その美しい瞳を涙に潤ませ、震える声で告げるその儂げな様子に、人々は折れた。

王太子個人は悪くないのだ。それに、国自体もまだ悪いものではな

い。ならば、姫の身を守れるだけの配備を行って嫁がせるしかないではないか。

喜びに頬を染め喜ぶ姫に、王は、そして兄王子たちは、仕方なさにそう許可をだしたのだった。　　姫がうつそりと、微笑んでいることなど誰も気づきはしなかった。

もちろん、姫とて何もしなかったわけではない。ひっそりと変装をし誰にも知られずに下町に出入りすることも多い姫である。そう、彼女を寵愛する周囲の人々は誰もそれを知らない。その下町で、ひたすらに趣味に没頭しつつもかの国の情報を集め、噂話を聞いた。彼女が出入りしていた周辺はそれはそれは治安がよろしくない界限でもあったので、それなりに面白い噂を聞くことができた。

かの国からのがれてきたという一人の男と出会ったのも、そこでのことである。

そして、彼女は着々と、表と裏の両方で準備を整えた。渋る側付きの侍女をなだめながら、無事準備を整え、この国へと乗り込んできたのだった。

そして、そのひとつは早速実を結んだ。なんとまあ、愚かなことだろう。姫の母国たる国は、勢いは強くないが、古くそれなりの安定した国である。その底力たるや、侮れぬものではないだろうに、そこを考えることのできないものがこの国には普通に存在している。なんとということか、と、その状況に憤るのが普通なのだろうが、姫にとってはそれもひとつの楽しみであり、これから思いをはせると、胸が高鳴る要因でしかない。

幸い、王太子はまとものように、表面は取り繕っていたが何やら心

労堪えぬ様子、さて、これからの行動が彼にとって幸いとなるか、更なる心労のタネとなるか　それもまた、楽しみなことだった。

「姫様、お顔が悪くなっておられますよ」

そつと注進に及ぶ侍女の呆れた声にくすりと笑い声を漏らして、姫はゆっくりと、晚餐のための身支度を整えるために侍女に歩み寄る。他のもの手など不要、信頼できる侍女だけがよい、と言えば、むしろそれを王太子は歓迎してくれた。外には信頼できる、ある意味手ごまとなつてくれている騎士たちがいることだろう。なにも心配などない。ただ、望むがまま、自らの求める結果をつかむだけだ。

淡い色のドレスに鮮やかに結い上げた髪に、シンプルながら品のある装飾品で飾り終えた姫は、窓辺へと歩み寄る。磨かれたガラスがきれいにはまる窓に映るは、派手だといって過言ではない部屋の調度の数々。その中に淡い色をまとい白い肌の、姫自身が移る。

「ねえ、酷く派手な部屋だけれど、ある意味では悪くないかもしれ  
ないわね」

くるりとすそを広げながら振り返れば、呆れつつもどこか賞賛の色を浮かべた事情が微笑む。

「姫様以上に、素晴らしい方はおられませんから」

くすくすとほほ笑む姫は、そつと窓から離れながら、思考を巡らせる。これからのこと、これまで打ってきた手のこと、そして、夫となる王太子のこと、そのさまざま要因が入り混じり、将来を予測し最善を割り出してゆく。

外より、晚餐の時間の声がかかる。エスコート役は誰が来るだろう。侍女に促されて、ゆっくりと隣の応接の間となっている部屋へと移動する。

さあ、一世一代の時が始まった。

丁と出るか半と出るか。

人生最大の、この賭けだけは、負けられないのだから。

鏡に映るその表情は、白く澄み渡る肌が周囲のちようどに映えて、どこか儂げであるにもかかわらず、その瞳は楽しげに強い意志を表して、輝いているのだった。

### 3・魅惑の髪に口づけを

どうやら、一筋縄ではいかない人間を、正妃として迎えてしまつたらしい。

晚餐までの時間、部屋まで姫を送つた彼は、とどまるところを知らず押し寄せる書類と陳情の処理のために、自らの執務室へと戻つた。執務室では、すでに書類が待ち構えており、どこかにこやかな側近が嬉々として整理をはじめ。いつもならばどこことなく不機嫌な様子で処理するであろうにその浮かれた様子に気が沈む。それについて言及すれば間違いなく聞きたくないことを聞かされるに違いない、と、知らぬふりで執務机に向かう。

とりあえず、今日はもう襲撃はないだろう。そう予測できてしまう現状にも、では明日はあるかもしれないのかと思わざるを得ない現状にも本当にうんざりだった。ため息と胃痛と、不眠はもう長い。ただでさえ憂鬱な日々だというのに、迎えた姫はどこか怪しい。いや、まだわからないが、少なくとも女性不信どころか人間不信の傾向すらある彼にとっては、頭痛の種に間違いなかった。

考えれば考えるほどのめりこんでいつてそのうち戻れなくなつてしまひそう、頭を振って意識を書類に戻す。必要な書類は多い、が、紛れているふざけた書類どもにも奇立ちが募る。これくらいお前らで処理しとけよっていつかなんで俺のところ、最終決済王印のいる書類が混じつてるんだ仕事しろよ親父いい！！と、内心ではどれほど罵倒しようとしたに手動かし指示を出す。しなければ埋もれるのだ。しなければ進まないのだ。ああ、何故自分はここにいるのだらう。再びそんな思考の迷宮にとらわれかけながらも、彼はひたすらに執務を進める。

あとに迫る晚餐の時間を考えないようにするがためにも、ただひたすらに執務に励むのだった。

しかし、時は人の上に無情にも平等に過ぎる。いかにいやだと考えまいとしたところで、時は進み時間がやってくる。

「お時間ですよ」

語尾が微妙に弾んでるように聞こえるのは、その顔が意地悪く楽しげに見えるのは、気のせいなのだろうか、と軽く睨み付けるように側近を見やれば、笑顔が広がる。そのまま側近は彼を立たせると、身支度をさせるために部屋の移動をはじめ、嫌だいやだと思つ間もなく、着替えを終えて姫を迎えに行くように言われる。

いきたくない、と、言えればどれだけ幸せなことか。

唯一救いと思えるのは、部屋に案内した時、調度を見た彼女の表情が一瞬苦く見えたことだろうか。過剰な浪費を好まない相手だとい。少なくともほかの、父の妃たちのようにこれでもかと後宮費を使い、さらに裏黒い部分では実家の金を使いまくる連中よりは、多少なりとも質素とは言わぬまでも堅実であつてくれればそれでいい。彼の中での希望は、今までの経験で擦り切れどうやらとつてもなく低いものになってしまっているようだった。

姫の部屋は、執務室からは遠い。婚姻の儀式を上げるまでの間は、まだ王太子宮に迎え入れることができず、正宮の後宮とされる区域の中の、王太子の妃たちが集うことになる区画の一部に室を与えら

れる。王の後宮とは庭を同一にするが、それぞれ別となっており、基本的に何らかの行事やなにかがないかぎり、王太子と言えども王の後宮に入ることとはなく、また、王と言えども王太子の後宮に入ることとはないようになっていた。

先触れの声聞きながら、やがてたどり着いた姫の室の扉が開く。扉の両側にこの室付きの侍女たちが見えるが、どうにもこれらは王の側妃たちの紐付きであるようで、注意が必要だと報告を受けている。数名その中に、信頼できるものを混ぜてあり、それらをちらりと見やればそつと頷くのが見える。やがて、国より連れてきた侍女に促され、姫が現れる。

ふわりと揺れる金系の柔らかな髪が、ゆっくりとお辞儀をし、そして顔をあげた。淡い色のドレスをまとうその姿はどこか儂げで、これはこの国で生きていけるのだろうか、という思いが、それまで抱いていた印象を押し流す様に湧き上がる。が、顔をあげまっすぐにこちらを向いて微笑む姫の眼を見た瞬間、がらりと印象が変わる。見つめる瞳は、その柔らかく魅惑する髪と肢体の儂さを裏切って、どこまでも強かに輝いていた。

「お待たせして申し訳ありません。まいりましょう、わが君」

告げられた声に促され、そして手を差し伸べる。重ねられた手は小さいものであつたけれども、恐らく彼女がつかむものはとても大きい。そんな思いにとらわれ、ゆっくりと伴い歩きながら、彼は静かに問いかけた。

「何を、成されますか」

あいまいな問いであり、そもそも姫として生きてきたものに向ける

言葉ではないかもしれぬ。けれど、彼は問わずにはいられなかつた。その彼女の眼に、その光に、その瞬間は確かに魅了されていたのだった。

くすり、と、楽しげな笑みをこぼした姫は、その顔にどこか悪戯めいた、しかしながらどこまでも果てしなく艶やかで強かな色を浮かべながら、唇を開く。

「何も。ただ、わが君を支え、お力になりましょう」

つられるように彼も小さく笑みをこぼす。支え、力になる、という。この国の現状を、王太子たる彼の状況を理解した上でのその言葉ならば、それは何もなさないことではない。何もかもを覆しかねないという、ことだ。ずきり、と、胃に痛みが走る。いや、現状が改善されるならそれに越したことはないだろう。だが、そうたやすく変わるわけがない。むしろこれから、どういう状態になるのか。自分が周囲が無理だったものを、どうするというのが。引きつりかけた表情を覆い隠し、それをごまかす様に彼は息をつく。

ゆっくりとほほ笑みあいながら、時折囁きあうように身を寄せ合う姿はまるで髪に口づけすらいるようで、その歩く二人の姿は、はたから見れば仲睦まじく穏やかな風情で、見送る侍女や従者がほうとため息を漏らす。

「なるほど。では、まずはお手並みを拝見しましょう。できれば、平穩に」

我ながらそれは無理だとわかりながらも、これ以上の頭痛の種は勘弁してほしいと、彼の本音がちらりとこぼれる。くすりと再び笑い声を漏らした姫は、そっと彼に視線を合わせ、あでやかに微笑んだ。

「危険なくして大きな見返りはありませんわ。わたくし、負ける賭けは大嫌いですの」

やがてたどり着いた晩餐の間の前、中にはおそらく、王と出席を許された上位の妃が数名いることだろう。これからの時間を思い、彼は次第に胃の痛みがひどくなってきているような感覚を覚え、僅かに顔を引きつらせるのだった。

#### 4・狼さんわたしを食べて

きらきらと輝く明かりと、豪華に飾られた室内には、ひそやかな話し声と小さな笑い声が響いていた。

伴われるまま、開かれた扉から姫と王太子が現れた時、その声は一時、しん、と静まり返る。

如才なく礼を取り王と会話をはじめる王太子の横で、静かに礼を取りほほ笑みながら姫は内心、うつそりとした裏黒い笑みを浮かべる。

おやおや、思った以上に化け猫さんたちがいるようですね。

絢爛豪華、といえは聞こえはいいものの、これ見よがしに着飾ったそれぞれは、かなり個人のセンスに左右されるらしく、一人二人を除いては、素材も品もいいはずであるのに、どこか品がなく見えてしまっていた。

「して、どうかな、この国は」

そこまでお年を召していないはずなのに、すでにどこか好々爺然とした王が、にこやかな笑みで姫に声をかける。たおやかに微笑みながら、そつと一度王太子に視線を向け、静かに頭を下げながら、姫は告げる。

「とても素晴らしい国だと思います。このような素晴らしい旦那様に嫁げること、嬉しく思いますわ」

瞬間、数名の気配が変わる。裏に秘めたひっそりとしたきもちを、鋭敏に察知したか。それとも、言葉の裏を勝手な妄想で勘ぐったか。

どちらにせよ、かなり切羽詰まっている方々がいるようだ。

これはこれは、旦那様も気が休まらないことだろう。

どこか遠くで、勝負開始の合図が響くのを感じて、姫は顔を伏せたまま、笑った。

謁見の間でのあいさつのときにも感じていたが、どうにもこの国の王の側妃たちは、少々頭が足りないのではなからうか、と、見下すつもりはなくとも思わされる。なるほど、これでは次の正妃を側妃から選ばないわけだと、内心で納得し、王太子の隣に用意された席で、語りかけられるまだ当たり障りのない言葉にこたえつつ、そつと王を伺う。

と、視線が合えば、どこかにんまりとほほ笑む姿。

おやおや、これは、と、姫は静かに微笑み返す。これはこれは、さすがに一国の王であるだけあって、なかなかのたぬきでいらしゃるようだ。王太子は気づいているのかどうかはわからない、が、あの憂鬱っぷりからするに、上手いことごまかされているような気がしないでもない。

これは楽しくなってきましたわ、と、隣でどこか堅い表情の王太子をよそに、姫は楽しげに小さな笑い声を漏らした。

「姫様は、国ではどのように過ごされておられましたの？」

静かに繰り出したのは、第三妃だろうか。今日の晚餐には、第一から第三までの妃が出席を許されているようだった。昼間、こちらに手出しをしてきた第五妃はここに出られる立場ではない。だからこそ焦ったともいえるだろうけれど、と、そのような内心は一つも出さずに、そつと首を傾げて言葉を紡ぐ。

「なにも、ただ、必要なことを学び、必要なことをし、与えられた責務を果たしております」

「そうですね。しかし、お国の方もさぞかしさみしい思いをされたでしょう。姫様はとても愛されているという噂でしたから」

くすくすと漏れる笑いに混じるのは、僅かなあざけりだろうか。なるほど、愛されているのにこの国に嫁いだこと、その他もろもろ、国もろとも侮るつもりだろう。そもそもからして、呼びかけが姫様とは、なんとまあ、愚かなことだろうか。

わざと頬を染め、一度ちらりと王太子に視線を向けると、恥ずかしげに眼を伏せる。

「その、わたくしが両親にお願いしました。王太子様を心よりお慕いしておりますから、どうぞ嫁がせてくださいませ、と」

まあ、と、大仰にいう第三妃の横で、第一、第二妃の顔色がわずかに変わる。そう、彼女たちは意味を理解したのだろう。隣国より古来ある我が母国の姫であるこの身が、この国に嫁ぐ意味、その理由が王太子である、ということ、その真なる意味は、母国がこの国自体を支持するのでは無く、王太子個人を支持するということに、同義となりうる。国と国との関係強化のように見えながらも、その実、王太子の後見を強めたこととなり、逆に言えば王太子に何かあれば、

隣国との関係は破たんする。そう、私は寵愛される姫であるのだ。父に、母に、兄たちに愛されている。その姫が、王太子を慕い婚姻を結ぶ。それが壊れた時、では別のものと、と、代わりを差し出されたとしてそれはあり得ないのだ。そして、そうするだけの力と縁が、この国からみれば小国のように錯覚されがちなわが国には、しつかりとあるのだ。

「そうです。王太子殿下は、そのように慕ってくださる王太子妃殿下をお迎えになることができ、幸せでございますわね」

ほほ笑んでそういいのけた第一妃は、さすがと言えはさすがなのだ。ろ。引きつりかけているようにみえなくもないけれども、それでもプライドにかけてか、繕いきってみせた。

「うむ、王太子よ、よき妃を得られたようだな」

その隣で満足そうに頷きほほ笑む王に、王太子たる彼は、静かに頭を下げていた。その左手が、そつと胃のあたりをさすっているようにみえたのは、見なかったふりをして差し上げることにした。

最初の勝負は、こちらが頂きましたわ。

これからまだまだ勝負は続くでしょう。だけれども、負けるつもりなど、ほんのひとかけらすらもない姫なのだった。

「お疲れ様でした。今日はゆっくりと休まれてください」

「あら、もうお戻りになりますの？ お茶でもいかがですか？」

姫にとってはとても有意義な晚餐を終え、王太子に伴われるままに戻った、私室にて、そういつて引き揚げようとする王太子に、姫はそう声をかける。と、同時に、傍仕えの侍女が素晴らしい手つきでお茶を用意し始めるのを見て、彼は諦めたようにため息をつき、その言葉に頷いた。それを見届け、席に腰を下ろした姫は、僅かに眉を顰めているようにすら見える王太子に、優しくほほ笑んだ。

「あなたを支えます、と、申し上げたでしょう？」

彼は小さく首を振り、解せないというように姫を見つめる。

「それは、何故、なのです？」

「申し上げた通り……では、納得いきませんか？」

「いきません。あの言葉通りには、あなたの眼は強すぎる」

くすり、と、姫はほほ笑む。私は確かに、ひとつのかけには勝ったようだ、と。思った以上に、旦那様となる人は、優秀で、優しいようだから。多少、気遣いが強すぎて、心に負担がかかっているようではあるけれど、それもまた、美点と言えば美点でしょう。

「そうですわね……では、一つだけ」

差し出されたいい香りのするお茶を楽しみながら、姫は一度目を伏せ、そして視線を彼にあわせる。

「あなたとならば、とても生きていくのが楽しいと思ったから、と、申し上げておきますわ」

自然と浮かぶ笑みは、いつも浮かべるほほ笑みではなく。艶やかで強かで、そして悪戯めいた笑顔だった。

しばし、じつとこちらを見つめていた王太子が、やがて、深く深く深く、長いため息を漏らす。

「素晴らしい妃を迎えた、というべきか、とんでもない方を迎えた、というべきか」

その、何とも苦渋に溢れた言葉に、姫は、軽やかに声を上げて笑う。

「悩まれることなど、ありませんわ。私は貴方の妃となり、あなたは私をめとられる。それが唯一で、それ以上でもないのですから。」

そう　わたくしはあなたのものとなりますのよ？」

そつと声を潜めて、旦那様、と、呼んで見せれば、今まで取り繕った表情が嘘のように、うるたえはじめる彼に、姫はそれはそれは楽しそうに笑う。

そう、わたくしはあなたのもの。そして　あなたはわたくしのもの。

さてはて、狙われた子羊の未来やいかに　などと、内心戯れながらも、姫は楽しげに笑い続けるのだった。

狼さんは、さて、どっち？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0356z/>

---

Training Box

2011年12月29日10時52分発行